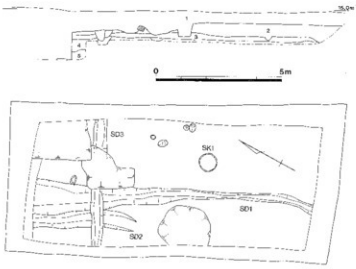


fig. 100　調査区平面・断面図

遺構と遺物　3条の溝、4基の小土坑、1基の土坑が確認された。小土坑、土坑については年代が明らかとなる遺物が伴わず、時期・性格などは不明である。溝は、東西に走る1条の溝（SD3）が南北に走る2条の溝（SD1・2）を切っているが、SD3の埋土からは肥前磁器などが出土しており、近世以降の遺構であると考えられる。2～6がSD3出土遺物である。2は弥生時代後期の甕の底部で、外面には叩き目を有する。3は瓦器塊の底部で時期は13世紀後半頃であろう。4・5はともに備前焼の擂鉢である。いずれも小片のため径の復元は困難である。間壁編年のⅣ期、15世紀のものと思われる。6は近世の肥前磁器の塊で、高台内に「□化年製」の銘を有する。SD1の埋土からは古墳時代に属すると考えられる中実の高坏脚部(1)や中世陶器が混在して出土している。いずれの溝も底面の勾配はほとんどないことことから、水路ではなく区画のための溝であったと考えられる。このほか包含層からも小量の遺物が出土したが小片ばかりであった。図示した7は近世の肥前磁器碗である。

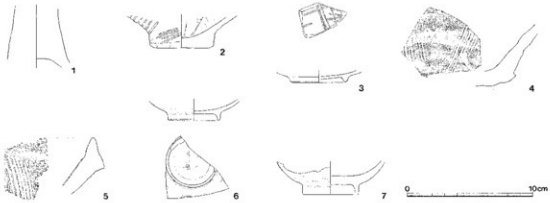


fig. 101　出土遺物実測図

3．まとめ　今回の調査によって、当地点では包含層が薄く遺物の分布もきわめて散漫であることが確認された。遺構も古墳時代および平安時代に属すると考えられるものは認められなかった。当調査地は日暮遺跡の縁辺部もしくは空白部にあたると考えられ、遺跡の空間的な広がりを想定するための資料を提示するにとどまった。

23. 日暮（ひぐれ）遺跡　第11次調査

1．はじめに

日暮遺跡は標高10～20ｍの扇状地端部に立地する。昭和61年に試掘調査によって存在が確認され、これまでの発掘調査によって弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代などの遺構面や、弥生時代から近世・近代に至るまでの遺物が発見されている。

本調査地は阪神・淡路大震災によって被災した店舗等の跡地で、店舗付共同住宅が建設されることになった場所である。日暮遺跡の南端部にあたり、平成７年６月に神戸市教育委員会が試掘調査を行った結果、遺物包含層が確認されたため、全面調査を行うこととなった。平成７年11月１日に現地立会を行ない、同年11月９日から平成８年２月１日まで現地調査を行なった。

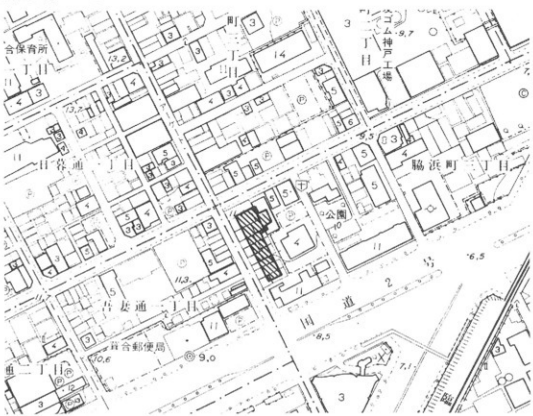


fig. 102
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査方法

発掘調査はＡ～Ｅ１・２区を排土仮置き場にして、Ａ～Ｅ３区以南を第４層上面まで先に掘り下げた後、Ａ～Ｄ１・２区の掘り下げを行なった。その際、Ｃ３～４区以東では第３層中に弥生土器を包含する暗灰色砂ブロックを検出したため、第５層上面まで掘り下げて遺物と遺構の有無を確認した。その結果、暗灰色砂ブロックの含まれる範囲は掘り下げの範囲内にほぼ限られ、またＣ区以東は現代の攪乱によって遺構・遺物包含層とも破壊されていると判断されたため、当初予定していたＤ～Ｅ１区と２区北半部の掘り下げは行なわなかった。

なお、第０層は重機により除去し、第１層から第３層までは各層の下面で遺構確認作業を繰り返しながら人力で掘り下げた。第４層以下は攪乱坑・トレンチ・遺構などの壁面で堆積状況を観察した。

基本層序　地形の傾斜方向は現地表面以下、第１～４層上面とも同じである。南北方向には南へ落ち、東西方向にはＡ区とＢ区の境界線付近を頂点に西へも東へも落ちる緩斜面である。各層とも南側ほど堆積が厚く、下位の層ほど上面の傾斜は急になる。

基本層序は下記のとおりであるが、第４層、第５層は攪乱坑壁面での観察所見をもとにしている。

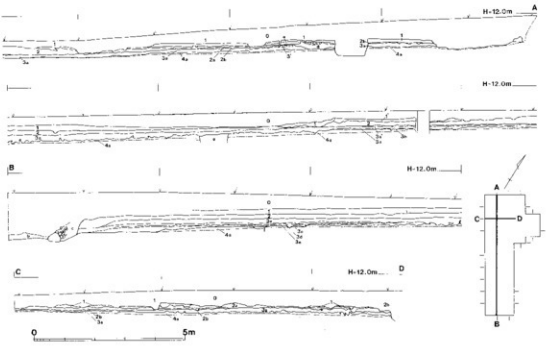


fig. 103　調査区土層断面図

第０層　褐色土。瓦礫・ガラス片を多く含む。下面では火熱を受けて変色した瓦や変形したガラス片などを特に多く含む。アジア・太平洋戦争後の盛土。

第１層　灰褐色～灰黄褐粘質土。部分的に灰褐色の層と灰黄褐色の層とに細分可能。第０層堆積以前の近世～現代表土。

第２層　灰褐色粘質土。室町時代の遺物包含層（包含層１）。直下の第３層上面では人為的な掘り込み等の遺構は確認されなかった。調査範囲北寄りでは２層に細分できた。

第３層　褐色～暗褐色砂質土。弥生時代～平安時代の遺物包含層（包含層２）。調査範囲北寄りの部分では層厚が薄く、砂を多く含む。南寄りは次第に層厚が厚くなり、いくつかの層に細分が可能である。南寄りでは下層の黒色粘質土を数cmの高さで斜め上方に巻き上げるように堆積していた。直下の第４層上面からは掘立柱建物３棟、柵跡１基、溝状遺構22条、小土坑多数を検出した。

第４層　黒色の粘質土を主体とする層。固くしまる。攪乱坑壁面等で観察したかぎりでは下記の３層に細分できた。

第４ａ層　黒色粘質土。上面付近から弥生土器が出土する。（Ｂ10区の攪乱坑壁面で確認した層厚は約15cm。以下同じ。）

第４ｂ層　黒褐色粘質土。径２mm程度までの淡黄褐色の花崗岩片を含む。遺物は確認されなかった。（層厚約40cm）

第４ｃ層　淡黒褐色砂質土。径２㎜程度までの淡黄褐色の花崗岩片を多く含む。遺物は確認されなかった。（層厚約15cm）

なお、Ｃ３・４区、Ｄ３・４区では第４層中に径７～８㎝程度までの暗灰色砂ブロックが含まれ、そのブロック中には弥生土器が包含されていた。

第５層　黄褐色砂。固くしまる。上面から約10cmの深さまで確認した。遺物は確認されなかった。

検出遺構

第１層下面で溝状遺構20条（SD１～20）と石垣跡１か所を、第３層下面で掘立柱建物３棟（SB１～３）、柵跡１基（SA１）、溝状遺構22条（SD21～42）と多数の小土坑を検出した。Ｄ３～４区・Ｅ２～４区では第４層中で遺物が出土したため第４層下面で遺構検出作業を行った。半円形に曲がる溝跡１条と不整形の土坑を10数基検出したが、伴う遺物はなく、形状からも人為的なものではないと判断した。

なお、第２層下面では遺構は検出できなかった。

第１層下面検出の遺構

溝状遺構

SD１～20

SD１～19は南北方向に並走し、SD20はSD１～19と直交方向（東西方向）にのびる。断面形はU字形を呈する。深さは最深部で10cm程度で、南側が次第に浅くなる傾向がある。埋土は灰黄褐色もしくは暗灰褐色の粘質土である。全て整溝跡と考えられ、SD３の埋土から江戸時代後期の肥前系磁器が出土したことから近世後期以降のものと判断される。ただし、切り合うものもあることから、細かくは複数時期に分かれる可能性がある。

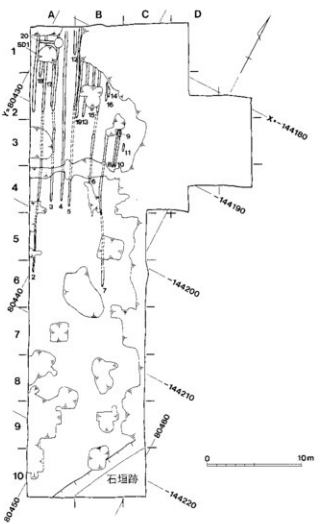


fig. 104　第１層下面遺構平面図

石垣跡

Ａ～Ｃ10区で検出した。北東－南西方向にのび、南側は北側より約40cm低い。石組みは基底石２個を残し、他は全て崩れていた。石の積み方はいわゆる間地積みで、裏込めには径10cm程度の円礫を使用する。石垣の積み方の特徴や、石垣の埋土から江戸時代後期以降の遺物が出土していることから、江戸時代後期から近代にかけて構築されたものである可能性が高い。

第３層下面検出の遺構

桁行４間（8.6 m、柱間2.0 ～ 2.1 m）、梁行３間（5.3 m、柱間1.8 ～ 1.95 m）の掘立柱建物で、主軸はN11° Wである。柱穴の掘形は長辺1.0 ～ 1.2 m、短辺0.6 ～ 0.8 mの方形で、埋土から推定される柱穴の直径は20～30cm程度である。

SB１

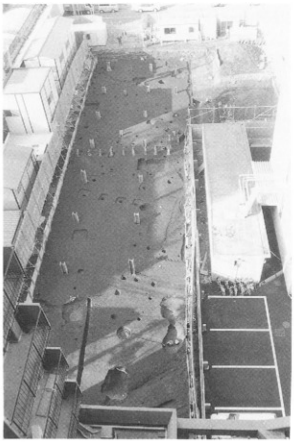


fig. 105　第３層下面全景

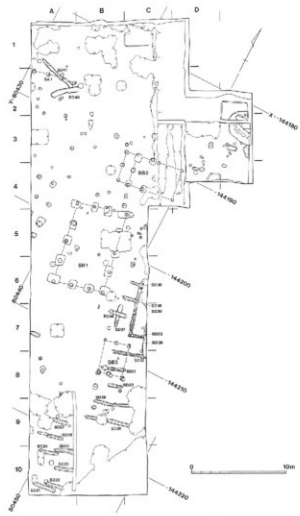


fig. 106　第３層下面遺構平面図

SB２　桁行１間以上（柱間1.8 m）、梁行２間（3.2 m、柱間1.5 ～ 1.7 m）の掘立柱建物で、東側は攪乱を受けているため、桁行の規模は不明であるが、桁の柱間３間分の長さの場所に小土坑を検出しており（P９・P10）、これをSB02の柱穴の残骸とみると、桁行３間（5.0 m）となる。主軸はN98° Wである。建物西側には廂を有し、廂の出は1.2 mである。柱穴の掘形はP１～４が長辺70～90cm、短辺60～70cmの長方形、P５～８は径約40cmの円形である。埋土から推定される柱穴の径は約20～30cmである。

SB３　桁行１間（3.5 m）、梁行２間（2.6 m、柱間1.3 m）の掘立柱建物で、桁方向は１間とするには柱間が広すぎ、間に簡便なつくりの柱が１ないし２本、存在したとも考えられる。主軸はN19° Wである。柱穴の掘形は長径35～50cmの楕円ないし長方形、埋土から推定される柱穴の直径は15～20cm程度である。

SA１　４本の柱穴が約1.6 m間隔で並ぶ柵跡で、各柱穴の掘形は径約40cmの円形、柱穴は径約20cmの円形である。

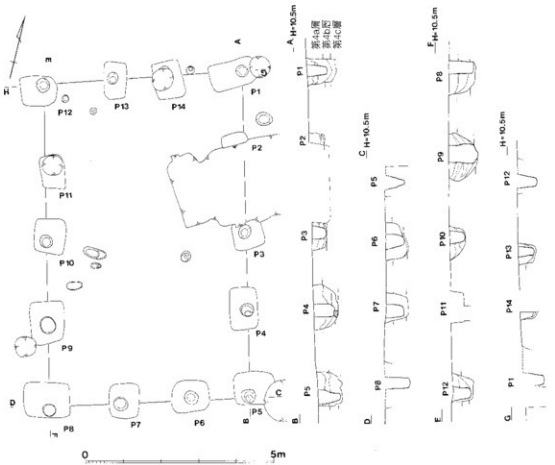


fig. 107
SB 1
平面・断面図

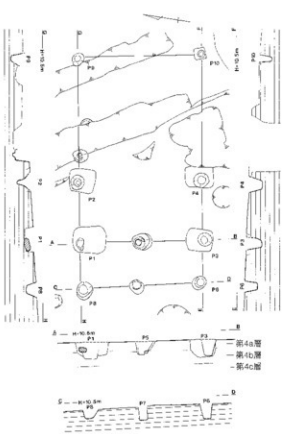


fig. 108　SB 2 平面・断面図

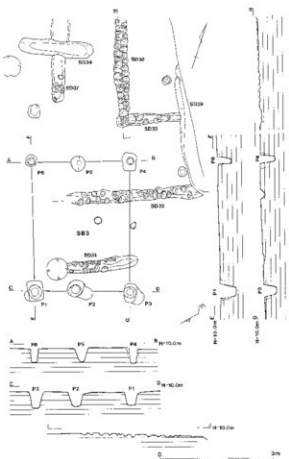


fig. 109　SB３平面・断面図

溝状遺構 SD21～41

SD21～39は調査範囲南半で検出した。SD21～36は東西方向、SD37～39は南北方向に、直線的に伸びる。埋土はいずれも暗褐色砂質土。SD２・３・５、SD４・６・７、SD８～16、SD17～19はそれぞれ1.8～2.0ｍの間隔で平行にのびており同時期に一連のものとして機能していたと推測される。

SD11～13には、両肩から底面にかかるかたちで上径15～20cm弱、深さ５cm程度の楕円形～不定形の浅い皿状の窪みが掘り込まれている。機能は不明ながら、溝の掘削に使用した道具の痕跡である可能性を指摘しておく。

３．まとめ

本調査地では２面の遺構面と、弥生時代前期以降各時代の遺物包含層を検出し、遺構が本調査地まで広がっていることが確認できた。第１層下面で検出した遺構は形態や伴出遺物から、近世後期以降のものと判断される。第３層下面で検出した遺構は明らかに伴出する遺物が少なく、厳密な時期比定は難しい。ただし、遺構面直上（第３層下部）では８世紀中葉の遺物が最も多く出土していることから、掘立柱建物は奈良時代中頃のものである可能性が最も高い。溝状遺構は第４層上面が巻き上げられるような堆積を示す範囲と重複して検出されたことなどから水田等の耕作に関連するものと考えられるが、SB３と重複していることから、建物跡とはある程度の時期差をもつと考えられる。

このほかにも、弥生・古墳・平安時代や中世の遺物が検出されていることから、周辺にはそれらの遺物に対応する時期の遺構が存在する可能性がある。特に弥生時代前期の土器は第４ａ層上部から出土しており、今後の調査の際には、今回の調査で無遺物層とした第４層にも充分な注意が必要である。

24. 日暮（ひぐれ）遺跡　第12次調査

1．はじめに

本調査は阪神・淡路大震災で被災し、全壊した共同住宅の建て替えに伴うものであり、「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針」に基づいておこなったものである。

日暮遺跡は六甲山麓より流れ出る生田川やその他の小河川によって形成された沖積地の南端に位置する。周辺の遺跡の立地から古代の海岸線は国道２号線付近に位置し、当遺跡は海岸に近接して立地していたと考えられる。昭和61年から10次を越える調査が行われ、古代および古墳時代の遺構面が確認されているほか、弥生時代や縄文時代の遺物が出土している。

以前の調査の中で特に注目される点は、布留式土器の最終段階期前後の竪穴住居が確認されたこと、平安時代の皇朝銭を埋納した地鎮遺構を伴う掘立柱建物が検出されたことで、平安時代後半の遺構群は緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、鉄製品などが多量に出土していることと併せてみても、当地域での中心的な遺跡であることが考えられる。

fig. 110
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査の方法

排土置場の関係で調査区を南北の中央で区切り、反転して調査を実施した。そのため、一部、遺構番号に不合理な点が存在する。

基本層序

当遺跡の基本層序は以下の通りである。

(1)表土　標高12.6ｍを測る。既存の建物の基礎であるコンクリートの下に煉瓦の建物の基礎が認められた。煉瓦の建物の基礎と共に太平洋戦争時の神戸空襲による膨大な量の焼けた瓦や溶けて癒着したガラス塊などがみられた。

(2)耕作土　ほぼ水平に堆積する。水田の床土である薄い明灰褐色粘質土と流水による灰

色砂が厚さ0.7mにわたって互層に幾重もみられ、洪水の度に水田を再開墾していたことがうかがえる。明治18年の地形図によると当地区は水田として利用されている。このことから水田としての上限の時期は明治時代であることが判明した。また、耕作土から中世の土器がみられ、当地区の近接して平成元年に実施された神戸市教育委員会の調査では江戸時代の水田が確認されていることから、近世までさかのぼる可能性が高く、中世の遺物を包含していることから中世までさかのぼりうる可能性もある。

(3)暗灰色砂質土層を中心とする層　厚さ0.3～0.4mを測り、全体的に粘質土と砂とが互層になってみられる。この層の上面には耕作による不規則な起伏が連続してみられ、その上に砂層が堆積する。平安時代後期の遺物を包含し、この層から出土した遺物は検出Ⅰの遺物として取り上げた。

(4)暗褐色粘質土を中心とする層　厚さ0.3mを測り、包含する遺物は古墳時代から平安時代前期に属する。全体的に南へ傾斜している。この層の上面において、溝1～6、9、10が検出された。この層から出土した遺物は検出Ⅱの遺物として取り上げた。

(5)暗黄褐色砂質土層を中心とする層　厚さ0.2mを測り、ほぼ南へ傾斜している。

この層の上面において、溝7、13～22が検出された。ごくわずかに弥生時代前・後期の土器が出土した。

(6)黒色粘質土層　標高11mでほぼ水平に堆積する。遺物、遺構はみられなかった。

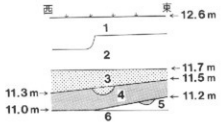


fig. 111　土層（堆積）模式図

主な遺構

今までの調査成果、および当地区の試掘調査の結果に従って、前記した(4)の土層の検出面を第1遺構面とし、(5)の土層の検出面を第2遺構面とした。各々の遺構面での検出状況は以下の通りである。

第1遺構面

溝1～5、6、9、10の溝を8条確認した。うち、溝1と溝5、および溝2、6、9、10は各々、同一の溝であり、基本的には4条の溝となる。いずれの溝の規模もほぼ幅0.3m、深さ0.1mを測り、溝底は船底状を呈し、規模の小さいものである。4条の溝はほぼ平行しており、磁北より西へ約10°振った方向に走る。各溝間の距離は溝1・5と溝2・

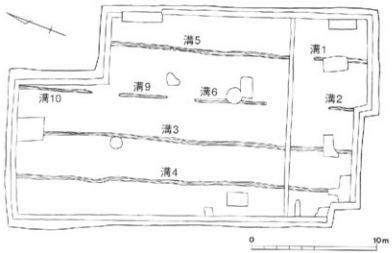


fig. 112　第1遺構面平面図

6・9・10の間が3.8～4.0m、溝2・6・9・10と溝3の間が3.3～3.0m、溝3と溝4の間が3.2～3.6mである。

各溝の埋土から出土した遺物はいずれも小片であり、溝の時期を出土遺物から決定するにはいたらないが、溝をパックする検出Ⅰの遺物群の年代観から溝の時期は平安時代後期と考えられる。検出面が同一であることも併せて考えると、4条の溝は同時期に併存ないしは、極めて近接した時期に各々が存在していた可能性が非常に高い。また、この溝の方向は現在の街路の方向とほぼ一致し、現在の街路は条里に影響をうけていることを考えると、これらの溝も条里を強く意識したものであることがうかがえる。

第2遺構面　溝7、13～22の溝を11条確認し、これらは検出面が高い調査区の北側に集中してみられた。いずれも深さが0.1mほどで非常に浅い。埋土に遺物はほとんどみられなかった。この遺構面をパックする検出Ⅱの遺物群の年代観から、これらの遺構は古墳時代ないし平安時代前期のものと想定され、確定的な時代観は得られない。

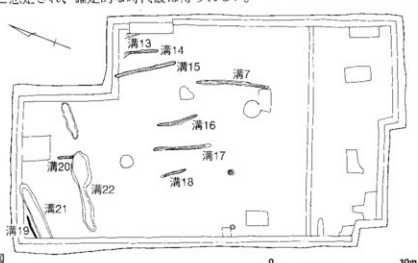


fig. 113　第2遺構面平面図

主な遺物　検出Ⅰ、Ⅱの層で土師器、須恵器などの遺物がまとまった量で出土した。その概要は以下の通りである。

検出Ⅰの遺物群　1は土師器の坏。口縁部内面に沈線がみられ、器壁は厚い。2～5は緑釉陶器。2は塊の底部で、底部は削り出して成形され蛇の目状を呈する。全面に薄緑色の釉がかかる。3は塊の底部で、底部は削り出して成形され蛇の目状を呈する。体部内外面に薄緑色の釉がかかる。4は塊の底部で、高台は付け高台である。見込みおよび、高台内に三叉トチンの

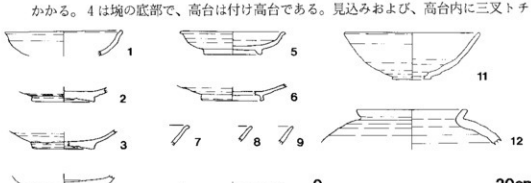


fig. 114　検出Ⅰ出土土器実測図

跡がある。全面に施釉され、高台外面から体部外面、内面は濃い緑色の釉が、高台内は透明の釉がかかる。高台内面に回転糸切り痕が残る。焼成はあまく胎土は橙色で軟質である。5は皿で、高台内面が無釉の他は全面に薄緑色の釉がかかる。高台は付け高台である。6、7は灰釉陶器である。6は皿の底部である。内面の一部、体部の上部に施釉がみられる。

7は塊の口縁部で端部が強く外反する。8～10は越州窯産の青磁と考えられるものである。8は塊の口縁と考えられ、内外面ににごった緑色の釉がかかる。9も塊の口縁と考えられる。内外面に黄色がかった緑色の釉が施されるが、遺存状況が悪く釉の大部分が欠落している。10は塊の底部。畳付の部分が無釉の他は残りの部分には淡緑色の釉がかかるが、釉の遺存状況は極めて悪い。高台内の中央が軽くへこみ、高台内に白色粘土の目痕が残る。

11、12は須恵器である。11は東播系の須恵器の塊で底部が突出する。12は短頸の壺の口縁である。

その他の遺物として、内面に放射状の暗文を施す土師器の坏、釘と思われる鉄製品、用途不明の滑石製品、凹面に布目圧痕、凸面に縄目圧痕がみられる平瓦などがみられた。全体的に遺物は調査区北側に集中してみられる傾向がある。

検出Ⅱの遺物群

検出Ⅰの遺物に比べ遺物の総量は少ない。13は土師器の坏で口縁内面に沈線がみられ、1にくらべ器壁が薄い。14、15は須恵器。14は受け部を有する坏身であり、受け部は低く内傾する。15は坏身であり、口縁部は横ナデを施す。

その他の遺物

当時の海岸線に近いこともあって、検出Ⅰ、Ⅱにおいても土錘の出土が目立った。16は棒状土錘。片方の孔は一部欠損する。検出Ⅰで出土。17は管状土錘。両端の一部が欠損。検出Ⅰで出土。18は有溝土錘。ほぼ完形で、検出Ⅱで出土。

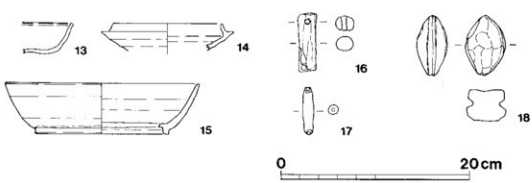


fig. 115　出土遺物実測図（検出Ⅱ：13～15　その他：16～18）

3．まとめ

以下に今回の調査で判明したことを列記することでまとめにかえたい。

(1)第1・2遺構面とも遺構は稀薄で、遺構の規模も小さく当地区は遺跡の中で南の縁辺部に位置する。

(2)いままでの調査で古墳時代の遺構面と平安時代の遺構面が確認されているが、今回の調査では明確な遺構として確認できたのは平安時代の遺構面のみであった。

(3)兵庫県下で数例しか出土例がない越州窯産の青磁を検出した。

(4)　(3)のことおよび今までの調査の報告から、平安時代後期には当地域の中心的な遺跡である可能性が高い。

25. 日暮(ひぐれ)遺跡　第13次調査

1．はじめに

日暮遺跡は、中央区日暮通を中心に広がり、これまでの調査で古墳時代の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物などが確認されている。

今回の調査は、個人住宅および集合住宅建設に伴うもので、工事により文化財に影響がある範囲について調査を実施した。

当該調査は、中小の河川によって形成された沖積地先端から低位段丘面に立地しており、ほぼ北西から南東にのびる微高地の先端部にあたる。

調査地は、第２次調査地の南に面している。

fig. 116
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査地は、２か所にわかれており、Ⅰ区・Ⅱ区として調査を行った。

①Ⅰ　区

調査地の基本土層は、１盛土、２暗茶褐色シルト混じり細砂、３暗褐色シルト混じり細砂、４黒褐色シルトである。このうち２、３層に遺物が含まれている。

発掘調査の結果、黒褐色シルト上面で、ピット７基、溝１条を検出した。但し、工事影響深度で調査を完了しているので調査区の北半については遺構面の検出に至らなかった。

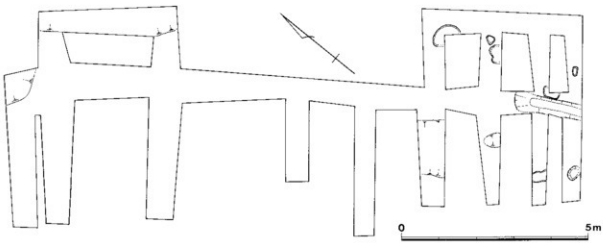


fig. 117　Ⅰ区遺構平面図

ピット　直径20～40cm、深さ10cm程度のものを７基検出したが、建物としてまとまらなかった。

溝　幅約40cm、深さ６cm程度の溝で、南側は調査区外にのびている。

出土遺物　遺物包含層中のものがほとんどで、細片ばかりである。なお、土錘の破片が１点ある。

②Ⅱ　区　調査は、基礎部分に限られたため、東西方向のトレンチを２本設定した。南トレンチを１トレンチ、北トレンチを２トレンチとして調査を行った。

基本層序は、G.L. から－100 cmまでが盛土である。以下、耕土・床土・旧耕土・旧床土・黒灰色シルト・暗黒褐色砂混じりシルトである。遺構は、G.L.－190 cmの暗黒褐色砂混じりシルト上面で検出した。遺構の時期は、すべて、７世紀前半代のものである。検出した遺構は、北西から南東に走る溝と柱掘形である。

SD11　２トレンチ中央に位置し、南北方向に走る幅86cm、深さ８cmを測る溝である。

SD12　１トレンチ西端に位置し、南北方向に走る幅50cm、深さ10cmを測る溝である。

SD13　１トレンチ西端に位置し、南北方向に走る幅68cm、深さ９cmを測る溝である。

SD14　１トレンチ西端に位置し、東西方向に走る幅25cm、深さ10cmを測る溝である。

SD15　１トレンチ西部に位置し、南北方向に走る最大幅1.1 m、最小幅60cm、深さ12cmを測る溝である。この溝は、北から南に向かって広がっている。SK01と切り合い関係にあり、SK01を切っている。

SD16　１トレンチ中央に位置し、南北方向に走る最大幅1.0 m、最小幅50cm、深さ15cmを測る溝である。この溝は、北から南に向かって広がっている。溝の南端部の底に、薄い炭化材が出土している。これは形状から、板材であったと考えられる。

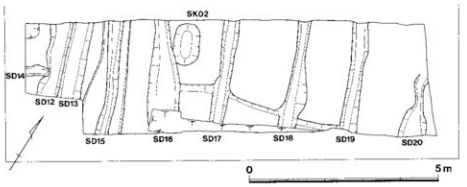


fig. 118
Ⅱ区１トレンチ
第１期遺構平面図

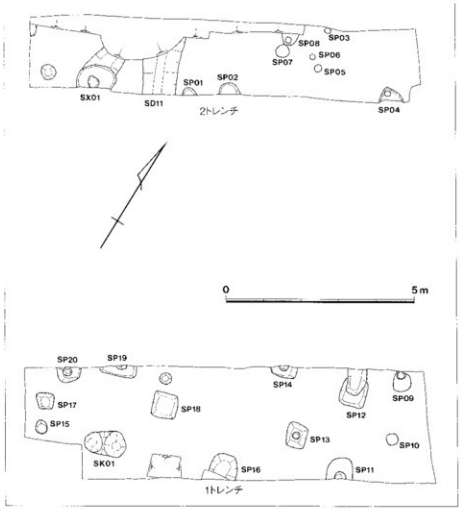


fig. 119
II区第II期遺構平面図

SD17　1トレンチ中央に位置し、南北方向に走る幅35cm、深さ5cmを測る溝である。

SD18　1トレンチ西端に位置し、南北方向に走る幅40cm、深さ12cmを測る溝である。

SD19　1トレンチ東端に位置し、南北方向に走る幅42cm、深さ10cmを測る溝である。

SD20　1トレンチ東端に位置し、南北方向に走る幅45cm、深さ13cmを測る溝である。

これらの溝群は、切り合い関係からみて、柱穴より後出のものである。出土遺物は各溝とも豊富で、それによると、この溝群は7世紀第1四半期のものと考えられる。

SX01　1辺90cmの、隅円の方形プランをもつもので、深さ86cmを測る。埋土は、下部にはシルト系の土であるが、上部には、炭やブロックを多く含んでおり、人為的に埋められた形跡がある。柱痕跡は確認できていないが、柱掘形の可能性がある。時期としては、出土遺物から、7世紀第1四半期の時期が考えられる。

SP01　2トレンチの中央に位置する直径30cm、深さ24cmを測るピットである。

SP02　2トレンチの中央に位置する直径55cm、深さ32cmを測る。柱跡は確認できていないが、柱掘形である可能性がある。

SP03　2トレンチの中央に位置する直径25cm、深さ21cmを測るピットである。

SP04　2トレンチの東端に位置する一辺40cm以上、深さ32cmを測る。柱跡は確認できていないが、柱掘形である可能性がある。

SP05　2トレンチの中央に位置する直径20cm、深さ15cmを測るピットである。

SP06　2トレンチの中央に位置する直径23cm、深さ14cmを測るピットである。

SP07　2トレンチの中央に位置する直径26cm、深さ18cmを測るピットである。

SP08　2トレンチの中央に位置する直径32cm、深さ22cmを測るピットである。

SP09　1トレンチ東に位置する直径40cm、深さ30cmを測るピットである。

SP10　1トレンチ東に位置する直径30cm、深さ10cmを測るピットである。

SP11　1トレンチ東に位置する1辺60cmを測る方形の柱掘形である。南端に直径25cmほどの柱痕跡をもつ。

SP12　1トレンチ東に位置する1辺60cm、深さ45cmを測る方形の柱掘形である。北方向に柱の抜取り穴が存在する。

SP13　1トレンチ東に位置する1辺60cm、深さ35cmを測る方形の柱掘形である。中央に直径20cmほどの柱痕跡をもつ。

SP14　1トレンチ東に位置する1辺60cm、深さ40cmを測る方形の柱掘形である。中央に直径25cmほどの柱痕跡をもつ。

SP15　1トレンチ西端に位置する直径30cm、深さ25cmを測るピットである。

SP16　1トレンチ中央に位置する1辺60cmを測る方形の柱掘形である。

SP17　1トレンチ西端に位置する直径25cm、深さ20cmを測るピットである。

SP18　1トレンチ中央に位置する1辺70cmを測る方形の柱掘形である。ブロックを多く含む埋土で、人為的に埋められたものと見られる。柱痕跡は検出できなかった。

SP19　1トレンチ西に位置する1辺90cm、深さ60cmを測る方形の柱掘形である。ブロックを多く含む埋土で、人為的に埋められたものと見られる。柱痕跡は検出できなかった。埋土の状況は、SX01に一致すると見られる。

SP20　1トレンチ西に位置する1辺60cmを測る方形の柱掘形である。中央に直径15cmほどの柱を検出した。

今回検出した柱群は、出土遺物から、7世紀第1四半期の時期が考えられる。

SK01　1トレンチ西端に位置する長径1.05m、短径65cm、深さ34cmを測る土坑である。底部に、東西に直径30cmほどのピット状の痕跡を持つ。柱掘形であった可能性がある。

SK02　1トレンチ西端に位置する長径1.00m、短径70cm、深さ15cmを測る土坑である。上部に炭が堆積していた。

3．まとめ

Ⅰ区の調査では調査面積や掘削深度の制約もあり、検出された遺構は少なく、時期も不明確であったが、Ⅱ区の調査においては、7世紀初頭の柱穴群を確認した。これらは、いずれも方形プランをもつもので、寺院跡や官衙などにみられるものである。これまでの調査では7世紀初頭の建物については、あまり知られていなかっただけに、注目に値する。

今回の柱掘形は、1辺60cmほどのものであるが、SP19などは、1辺90cmほどの規模をもつと考えられ、周辺の柱群より、一回り規模の大きなものがある。この柱は、恐らくSX01につながると考えられる。このことから、この周辺部でも特に微高地の頂部には、大きな建物群が存在していると考えられ、今回検出した柱穴群も、その一部か、少なくとも塀の一部に当たるものとみられる。

26. 日暮遺跡　第14次調査

1．はじめに

日暮遺跡は、昭和61年度に市営住宅建設に伴って実施した発掘調査によって発見された遺跡である。この調査では、古墳時代の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物が検出された。その後の13次におよぶ調査により、縄文時代から近世に至る遺跡であることが確認されている。当遺跡は、六甲山系の南側に広がる複合扇状地上の微高地上に立地し、当該調査地はその微高地の東側の縁辺に位置する。

平成７年１月17日に起こった阪神・淡路大震災は神戸市内に甚大な被害をおよぼした。今回の調査は、この度の地震で倒壊した工場の跡地に、被災者を対象とした市営住宅を建設する計画があがり、それに伴う調査である。

調査範囲は建物の計画されている部分のうち、試掘調査によって埋蔵文化財が残存している範囲のみを対象とし、３つの調査区に分けて実施し、東からⅠ区～Ⅲ区とした。

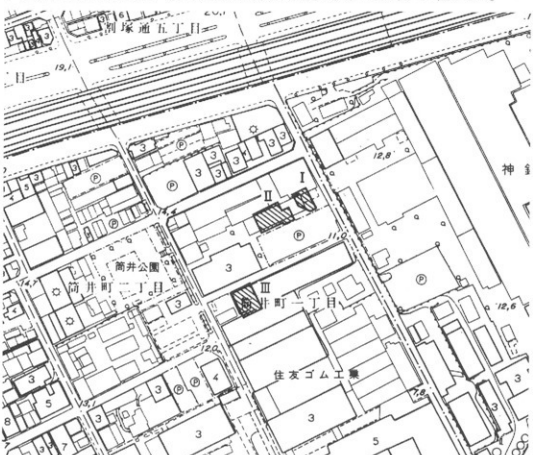


fig. 120
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

基本層序は各調査区共通して、上から現代の盛土層・淡灰色シルト混じり細砂層（近世から近代にかけて水田耕土層）・暗茶褐色シルト質細砂層（中世遺物包含層）・暗茶褐色シルト質細砂層（中世遺物包含層）・暗茶褐色シルト質細砂層（中世遺物包含層）・黄褐色粗砂ないしは灰色粗砂ないしは明灰色粘土層（遺構面ベース）となる。それより下層は、土壌化した旧地表面は存在するが無遺物である（断ち割り調査の結果、この旧地表面を貫く噴砂現象の跡が確認された。但し噴砂を起こした地震の時期は不明である）。

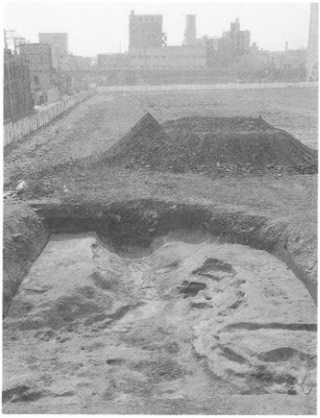


fig. 121　Ⅰ区全景

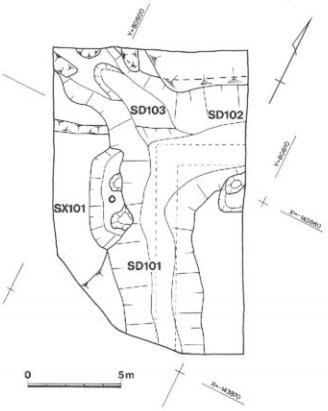


fig. 122　Ⅰ区遺構平面図

Ⅰ区　　Ⅰ区では中世後期から明治初期まで使われていた溝１条（SD101）とその溝に流れ込む中世後期の溝１条（SD102）、およびSD101に付随する窪み（SX101）が検出された。

SD101　SD101・102は15世紀頃に掘削された溝で東から西方向に流れ、90度向きを変えて南に流れている。最終的に埋まる明治初期まで度々改変されているため本来の幅・深さは明らかでないが、溝の堆積状況を見ると掘削当初は幅約５m、深さ約1.5m程度であったと考えられる。19世紀頃には石積みの溝となり、最終的には幅1.8m、深さ2.5mで石を４～５段積んだ溝となる。

SD102

SD103　幅約3.5m、深さ約0.2～0.5mで北西から南東方向に流れ、SD101の屈曲コーナーに流れ込む溝である。SD101の掘削当初の時期に機能していた溝である。

SX101　SD101の西側に接する長さ５m、幅約2.5mの半円形落ち込みである。SD101側に向かって落ち込んでおり、SD101に降りる施設であった可能性がある。機能した時期は掘削当初と考えられる。

Ⅱ区　　Ⅱ区では不定形の土坑２基とピット２基、牛の足跡が多数検出された。

SK201　長軸1.8m、短軸1.7m、深さ0.2mの浅いすり鉢形を呈する土坑である。

SK202　長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.2mの浅いすり鉢形を呈する土坑である。東側は攪乱によって削られているため全体の形状は明らかでない。SK201・202共に遺物は出土していないため、正確な時期の確定はできないが、検出された層位から13～14世紀の遺構と考えられる。ピットからも遺物は出土していないため時期は確定できないが、土坑と同時期と考えられる。

牛の足跡　牛の足跡はⅡ区の全域で検出されたが、遺構面ベース層が粘土層の部分で顕著に検出さ

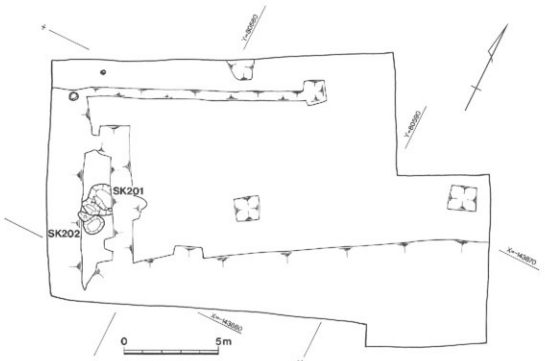


fig. 123
Ⅱ区遺構平面図

fig. 124　Ⅱ区全景

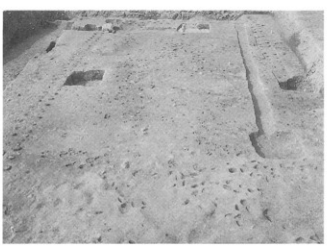


fig. 125　牛の足跡

れ、砂層の部分では明確ではなかった。そのため足跡の方向性などは明らかでない。しかし、この足跡が検出されたことから、黒褐色粘質シルト層は中世後期の水田耕土層と考えられる。

Ⅲ区　Ⅲ区では遺構面の地形が西から東に向かって緩やかに下がっている。これは、日暮遺跡の主体が立地する微高地の東の縁辺にあたっているためと考えられる。この調査区では古墳時代前期の溝１条（SD301）と13～14世紀の溝１条（SD302）が検出された。

SD301　幅1.2～2.0ｍ、深さ0.4ｍで断面が逆台形を呈する古墳時代前期の溝である。調査区内では北から南に蛇行して流れる。しかし、調査区の南端付近で大きく屈曲する箇所は、別の溝に合流している可能性があるが、調査区外に溝の半分が出ているためあきらかでない。この屈曲部から北に２ｍの地点で、古墳時代前期（布留式古段階）の甕が１個体、溝の西側肩から出土している。他に、この溝内からは縄文ないしは弥生時代の磨石とサヌカイト製の楔形石器が各１点出土している。

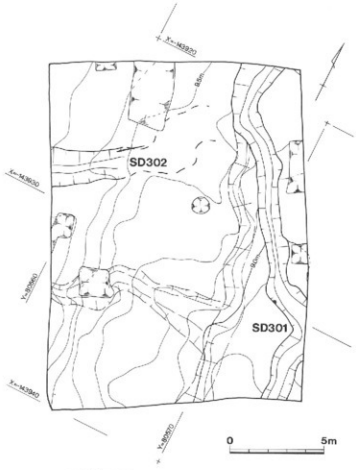


fig. 126　Ⅲ区遺構平面図

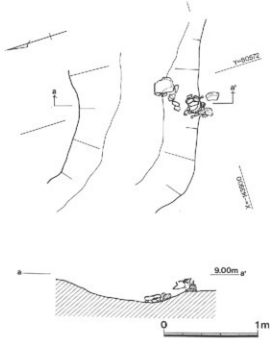


fig. 127　SD301 遺物出土状況平面・断面図

fig. 128　Ⅲ区全景

fig. 129　SD301

SD302　幅 1.8 m、深さ 0.2 m の中世後期の溝で、西から東に、すなわち微高地の高い部分から低い方に流れる溝である。東にいくにつれてその形状は不明確になる。溝内から長さ 1.5 m、厚さ 3 cmで両端を尖らせた用途不明の木製品が出土している。出土した土器より13～14世紀の溝と考えられる。

3．まとめ

今回の調査では古墳時代前期と中世後期から近世にかけての遺構が検出された。しかし遺構の密度は散漫であり、旧地形の形状からも今回の調査地は日暮遺跡の縁辺部にあたると考えられる。特に中世以降は集落の外側に広がる水田であったと思われる。

27. 雲井遺跡　第7次調査

1．はじめに

雲井遺跡は、六甲山系に源を発して南流する生田川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩やかな傾斜地（標高12～15m）に立地している。

これまでに実施されてきた6回の発掘調査成果から縄文時代早期から弥生時代中期にかけての複合遺跡であることが判ってきている。

今回の調査は、9階建てのワンルームマンション建設に先立つもので、敷地面積約400㎡のうち、建物建設予定の底地部分約250㎡を対象として調査を実施した。

fig. 130
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査では、解体された旧建物の基礎部分を重機で撤去した後、盛り土・攪乱層を重機で掘削・場外処分した。以下は人力で掘削を行い、掘削土は順次場外処分をしながら掘削作業を進めた。

第1遺構面

旧耕土層・暗褐色シルト質細砂層を除去して、乳褐色シルト混じり細砂層上面で確認した古墳時代前期初めの遺構面である。攪乱が多く、遺構面の遺存する面積が少なかったため、溝状遺構が1条確認されたのみである。

SD101

最大幅88㎝、最大深さ34㎝の溝状遺構で、北西から南東方向へのびている。遺物の大半は埋土下層の暗褐色シルト混じり細砂～細礫から出土した弥生土器であるが、上層の淡黒褐色シルト質細砂からわずかに古墳時代前期初めの土師器が出土している。

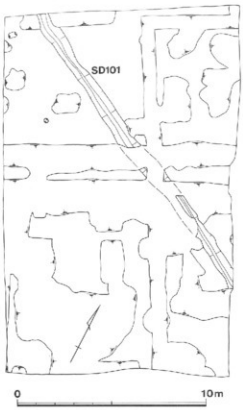


fig. 131　第１遺構面平面図

fig. 132　第２遺構面平面図

fig. 133　第１遺構面全景

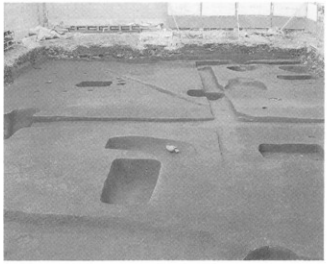


fig. 134　第２遺構面全景

第２遺構面　第１遺構面の基盤層である乳褐色シルト混じり細砂層を除去した褐色シルト質極細砂～細砂層上面で確認した遺構面で、弥生時代中期のものと考えられる。掘立柱建物１棟、溝状遺構３条、土坑２基、土器埋納ピット１基、ピット６基が確認された。

掘立柱建物　調査区北西部で確認された２間（3.3 m）×３間（3.2 m）のものである。柱穴はいずれも直径20cm前後、深さ約30cmのものである。

SP216　土器埋納ピットで、直径41cm、深さ21cmのピット内に弥生土器甕が横位置に据えられていたものである。ピット内埋土および土器内から炭化した種子が十数点出土している点が注目される。

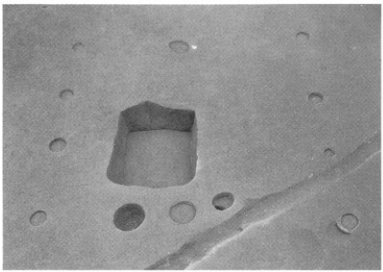


fig. 135　掘立柱建物

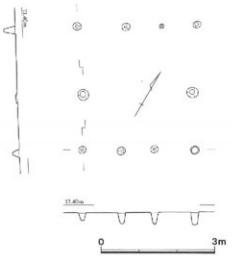


fig. 136　掘立柱建物平面・断面図

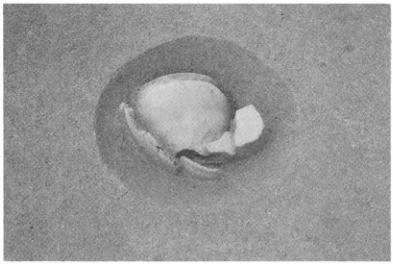


fig. 137　SP216 土器出土状況

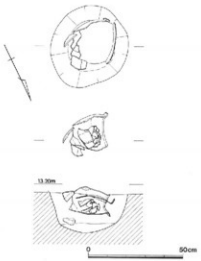


fig. 138　SP216 平面・断面図

SD201　調査区北端で検出した円弧を描く溝状遺構である。最大幅 1.6 m、最大深さ31㎝である。

SD202　調査区南半で確認できた東西方向にのびる溝状遺構である。最大幅80㎝、最大深さ24㎝で、埋土は淡乳褐色シルト混じり細砂～細礫である。

第３遺構面　第２遺構面の基盤層を除去した乳褐色シルト混じり細砂～中砂層上面で確認した遺構面で、弥生時代前期のものと考えられる。出土遺物が小片かつ少量のため、その時期については明確にできない。溝状遺構、土坑、落ち込み、ピットなどの遺構が確認されている。

第４遺構面　第３遺構面の基盤層および暗褐色シルト質極細砂層を除去した乳色シルト混じり細砂～粗砂層上面で確認した遺構面である。土坑５基、ピット２基が確認された。

SK404　長径 3.0 m、短径 1.2 m、深さ50㎝の土坑で、埋土上面から縄文土器が出土している。他の遺構からは出土遺物がないものの、遺構面は縄文時代中期～後期と考えられる。

第４遺構面下層　試掘調査では、今回建築工事に伴って掘削される G.L.－ 3.2 mまでの深さの埋蔵文化財の状況について把握できていなかったため、幅 2.5 m、長さ15mのトレンチを設定して断ち割り調査を実施した。

その結果、土壌化層は認められるものの、遺構・遺物は全く確認できなかった。

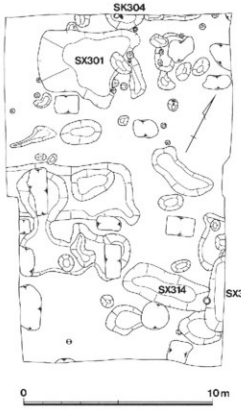


fig. 139　第3遺構面平面図

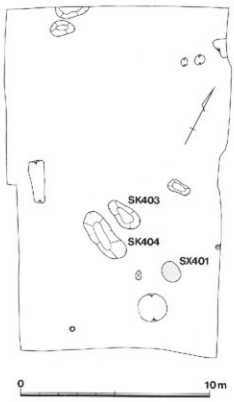


fig. 140　第4遺構面平面図

fig. 141　第3遺構面全景

fig. 142　第4遺構面全景

3．まとめ

今回の第7次調査は、これまで実施してきた調査地点とは、位置的にやや離れていることもあり、基本層序も異なり、雲井遺跡内において新たな成果を収めることとなった。

こうした中で、古墳時代前期初めの遺構は、周辺での遺構の拡がりについては現状では明確にできないものの、今後の調査によってその範囲が明確になってくるものと考えられる。一方で、弥生時代前期～中期では、遺構頻度も低く、出土遺物も少なく、今回の調査地点が集落址からは離れた位置を占めていると言わざるを得ない状況であった。また、縄文時代早期の遺構・遺物は全く確認できなかったことは、集落址の立地範囲について示唆に富む結果と言えよう。

28. 旧三宮駅構内遺跡（きゅうさんのみやえきこうない）　第5次調査

1．はじめに

旧三宮駅構内遺跡は、故福原潜次郎氏が旧三宮駅解体工事の際に弥生土器を発見したことによって、発見された遺跡である。旧三宮駅は、明治21年頃に建設されたと考えられており、この駅があった場所は、現在の元町駅周辺と考えられている。

平成2年度から、神戸生田中学校建設に伴い発掘調査が行われ、奈良時代の掘立柱建物などが確認されたほか、遺物としては縄文時代から近世にいたる各時代のものが出土した。

今回の調査地は、震災による復興関連事業に伴い、平成7年7月に試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された。このため当該地は、試掘調査の結果を基に直ちに協議を行い、基礎部分のみの調査を行った。

fig. 143
調査地位置図
1：2,500

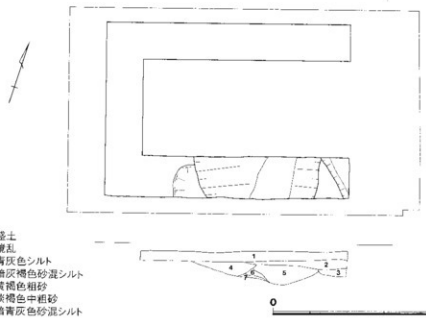


fig. 144
遺構平面図

2．調査の概要

南側のトレンチを除いて、他の地区では攪乱のために遺構等は確認できなかった。

SX01

南側のトレンチでは、調査区中央において、溝状の落ち込みを確認した。この遺構は、試掘調査によって確認された遺構につながるものと考えられる。これからすると、この遺構は北東方向に走るものとみられる。

遺構の規模は、幅３ｍ、深さ60cmを測る。出土遺物は、わずかではあるが、縄文時代から、弥生時代にかけてのものが出土している。

3．まとめ

今回の調査では、面積の制約もあり、東側のトレンチで、遺構をわずかに確認したにすぎない。

しかし、故福原潜次郎氏が旧三宮駅解体工事の際に弥生土器を発見したとされる近接地点で、弥生土器を伴う遺構を検出したことにより、周辺部にまだ、縄文時代から弥生時代にかけての遺構が残されている可能性が示唆されたことは、ひとつの成果と言えよう。

29. 上沢遺跡　第2次調査

1．はじめに

今回の調査区の西数百メートルの地点で、縄文時代後期から弥生時代後期にかけての集落跡が確認されている。特に弥生時代前期の資料は、近畿では最も古くなる大開遺跡のものと並行するもので、今回の調査区は上沢遺跡の集落内であると考えられた。

調査の目的は、阪神・淡路大震災の復興に伴う個人住宅建設に先立つ発掘調査である。

2．調査の概要

住宅建築部分を対象として調査地区を設定し、発掘調査を行なった。

土層は表土（第1層）の直下に旧耕土（第2層）、第3、4層は洪水の堆積で、第4層の小規模な洪水堆積層を第3層の大規模な洪水堆積層が削っている。第5層に土壌化した層があり、水田の可能性もあるが積極的な根拠を欠く。第6層は再び洪水層で、第7層の水田を覆っている。この水田以前にはほとんど流力のない「よどみ堆積」（第8層）があり、その下層は再び洪水砂層の堆積がある。この第9層でも縄文土器と思われる破片が出土している。この層までが地盤改良を行なう地表から180㎝の間に堆積している。

遺物は第4層の洪水砂層から弥生時代後期の土器がコンテナ1箱分が出土している。この第4層は砂粒も細かく、流力も弱い。この第4層以外では第8層から縄文時代晩期から弥生時代前期と見られる土器片が数点と、さらに下層の第9層洪水層からも縄文土器らしい破片が出土している。

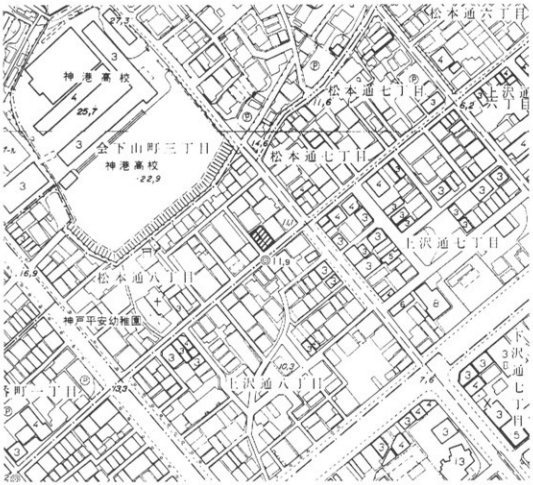
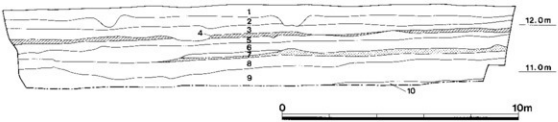


fig. 145
調査地位置図
1：2,500

3．まとめ

今回の調査区では洪水堆積やこの土地が低湿地であった時の遺物のみが確認できた。洪水堆積層の弥生時代後期の土器はローリングを受けていないことから、この調査区からほど遠くない位置に集落がある可能性が強い。

第1次調査で出土していた縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物は、破片が数点確認できたのみで、集落自体は今調査区から多少離れているようである。土層の観察からは洪水が何度も繰り返され、洪水後の低湿地となった場所に水田が営まれるということが繰り返されていたようである。



1. 表土
2. 灰色粘質土(耕作土)
3. 黄灰色粗砂～暗灰色砂礫(洪水堆積)
4. 淡灰褐色細砂(洪水堆積)
5. 暗灰褐色砂質土(耕作土か)
6. 淡灰色粗砂～明灰色粗砂(洪水堆積)
7a. 灰褐色粘質土
7b. 暗灰褐色粘質土(水田か)
8. 暗茶褐色粘質土
9. 暗灰褐色砂礫～灰色細砂(洪水堆積)
10. 淡灰褐色粘質土

fig. 146　調査区土層断面図

また、今回の調査では現地表面から180㎝までしか調査できなかったため地山を確認していない。最下層の第9層洪水堆積の中から縄文と思われる土器が出土しており、さらに下層に遺構がある可能性を残している。

30. 上小名田（かみおなだ）遺跡　第16次調査

1．はじめに

本遺跡は六甲山系の北、武庫川の支流である八多川の流域に所在する。縄文時代および弥生時代から室町時代・江戸時代と各時代の遺構・遺物が認められる複合遺跡である。

北東に流下する八多川の流域には上流側から附物遺跡・吉尾遺跡・上小名田遺跡・下小名田遺跡・中遺跡・日下部遺跡・日下部北遺跡と縄文時代から江戸時代に至る各時代の遺跡が存在するが、平安時代から鎌倉時代において、上小名田遺跡周辺はそれら村々の中で中核的な位置を占めていたようである。

昭和61年から平成元年にかけて数次にわたっておこなわれた六甲北有料道路築造にともなう調査では、平安時代中頃から鎌倉時代にかけての大規模な遺跡が確認された。掘立柱建物が34棟、そのほか、土坑・木棺墓・溝・流路などが検出されている。掘立柱建物のうちSB03・04は10世紀後半の柱間9×4間（21.6×9.5m）の建物で、建物の四面に廂をもつハイクラスな邸宅である。また柱間8×5間（19.5×13.0m）で床面積253.5㎡と市内最大級の規模をもつSB16も10世紀後半の邸宅であり、柱掘形内に地鎮のため皇朝十二銭のひとつである乾元大寶（初鋳958年）22枚が納められる。その後の11世紀から12世紀にかけても規模の大きい掘立柱建物が継続的に建てられている。これら建物の付近からは、古代の役人の身分を示す石帯とよばれるベルトにつける飾り石である丸鞆や、緑釉陶器の香炉破片などが出土しており、一般の民衆が持ちえない遺物が出土している。これらの調査成果から平安時代中頃から鎌倉時代にかけて屋敷がこの地にあり、これまでに発掘調査で確認された建物としては市内でも最大級のものが確認されるなど、平安時代中頃から後期にかけてはとりわけ大規模な邸宅がこの地に存在したことが明らかとなった。

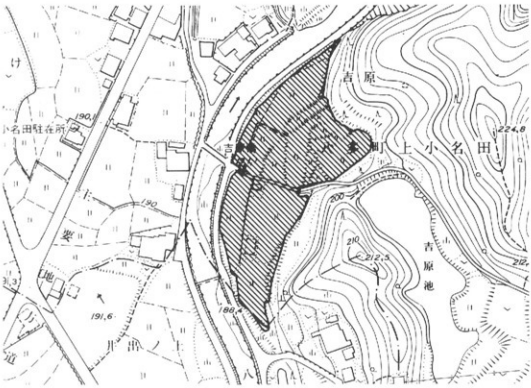


fig. 147
調査地位置図
1：2,500

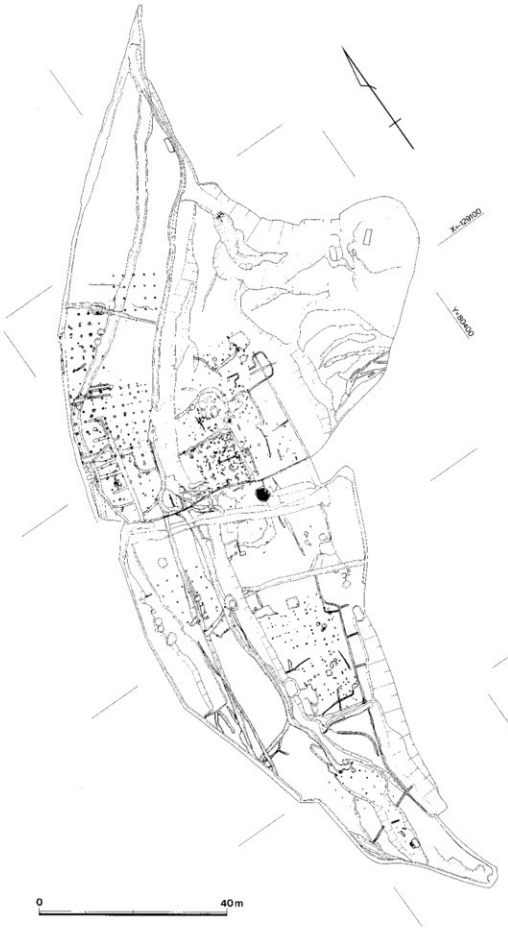


fig. 148
調査地平面図

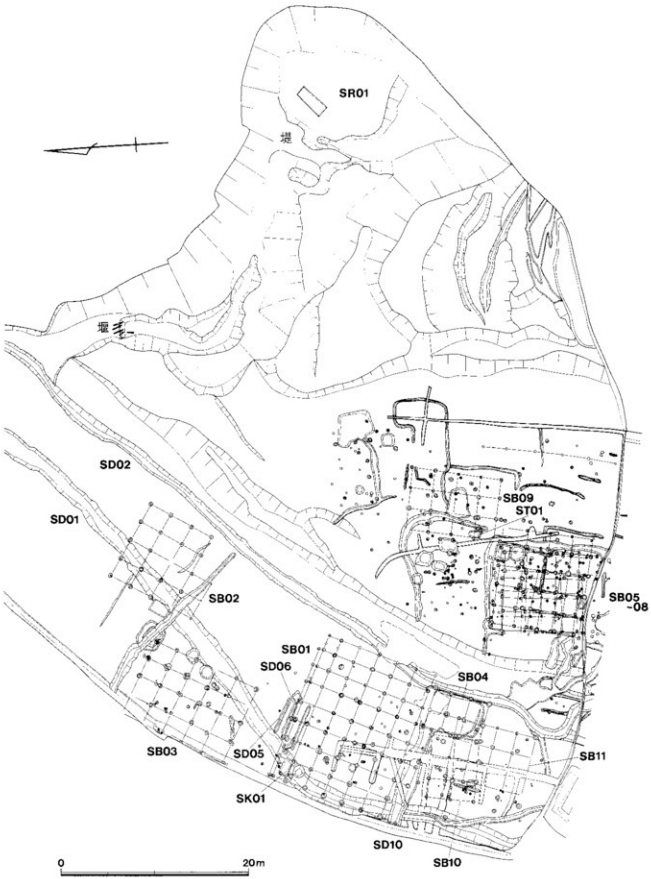


fig. 149　Ⅰ区遺構平面図

2．調査の概要　今回の調査は、宅地造成事業にともなう事前調査である。調査面積は北半約4,500㎡・南半約3,000㎡の計約7,500㎡である。北半をⅠ区、南半をⅡ区として調査を行った。

層　序　調査地の基本的な層序は、上から1a層　現耕土、1b層　盛土、2a層　明灰色砂質シルト（遺物包含層）であり、この下面が遺構確認面となる。すなわち北の谷部、東の上段、および中段では浅黄色～にぶい黄橙色の砂混じりシルトあるいは砂岩もどきの砂層、西の下段では古い流路跡に堆積した淡黄色シルト質砂層の上面で遺構が確認される。

Ⅰ　区　谷部のSR01で堤1・堰1が確認された。上段は耕作地造成の際の削平により、谷部分以外で遺構は検出されなかった。中段では掘立柱建物5・柵列2・土坑5・溝6・土壙墓1・火葬土坑1等が検出された。下段では掘立柱建物6・溝9・土坑6が検出された。また調査区の北にある谷部分では堤および堰が検出された。以下主な遺構について述べる。

fig. 150　調査地全景

SB01　下段北半に位置する。主柱の柱間南北5間×東西7間以上で北・東・南に縁あるいは廂をもつ総柱の掘立柱建物（南北14.5ｍ×東西16.4ｍ以上）で主軸を25°にとる。西辺が調査区外になるために規模等確定はできないが、北西に掘え甕があることや南北の柱間との比率から主柱東西7間で西辺にも廂あるいは縁がつく建物になると思われる。この規模であるならその床面積は約260㎡、およそ80坪となる。その東辺の南半と南辺の東部に上面をそろえないかたちでの石敷きがある。

SD01・02と切り合い関係にあり、SB01の方が新しい。出土遺物から平安時代末から鎌倉時代の遺構であると推定される。

この家は火災によって焼失しており、炭化材の遺存状況から同時に存在していた遺構があきらかになっている。すなわち北辺の雨落ち溝SD06、南辺の溝SD10およびSB04、さらに家屋内北西隅にある須恵器大甕2つを掘えた土坑SK01、南東辺の石敷き（SX03）などである。柱穴P7・8・17・29・42・68Pには柱根が遺存していた。直径約18cmの断面円形のものである。その他の柱の多くは滅災後抜き取られている。P7・8は家の東側の廂あるいは縁にあたるが、この柱材は竹であった。家の構造を復元するための具体的な資料である。

fig. 151　SB01P－71

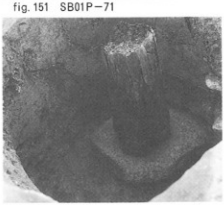


fig. 152　SB01P－8

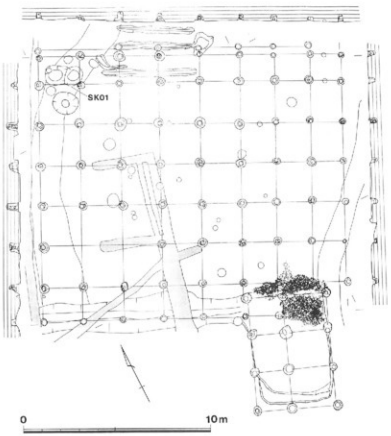


fig. 153　SB01・SB04 平面・断面図

fig. 154　SB01

fig. 155　SB04

SB02　下段北半に位置する。柱間南北４間×東西４間（9.8 × 9.2 m）で主軸を33°にとる総柱の掘立柱建物。南辺の柱列の遺存状況が悪く、当初の遺構検出時には３つが確認できたが、調査中に消失。SD01の埋没後にSB02が建てられる。柱痕から柱は直径18cm程度の断面円形であることが確認された。出土遺物から12世紀末から13世紀の遺構であると推定される。

SB03　下段北半に位置する。柱間南北５間×東西４間以上（12.2 × 8.9 m以上）で主軸を29°にとる総柱の掘立柱建物。西辺が調査区外となる。柱痕から柱は直径18cm程度の断面円形であることが確認された。

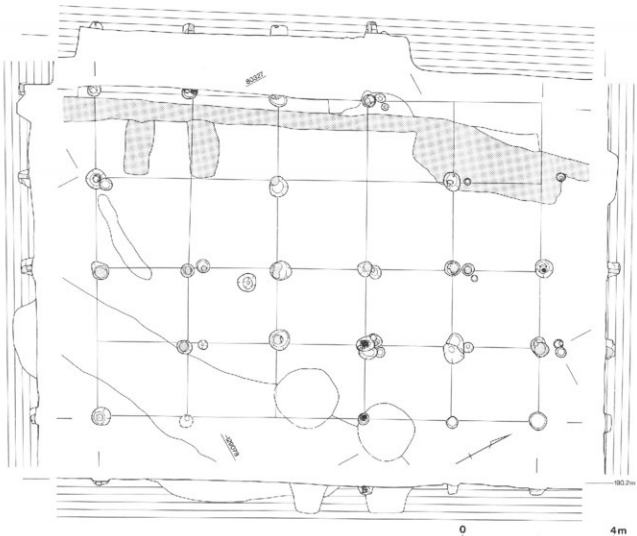


fig. 156　SB03 平面・断面図

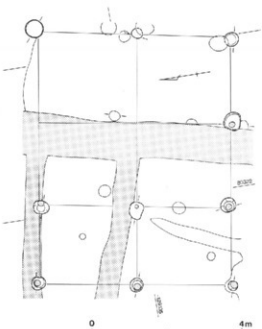


fig. 157　SB10 平面図

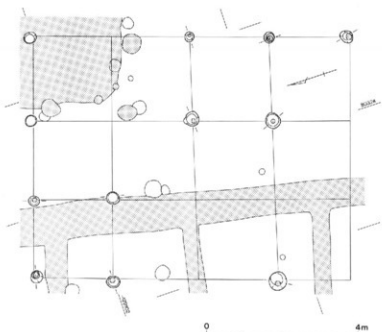


fig. 158　SB11 平面図

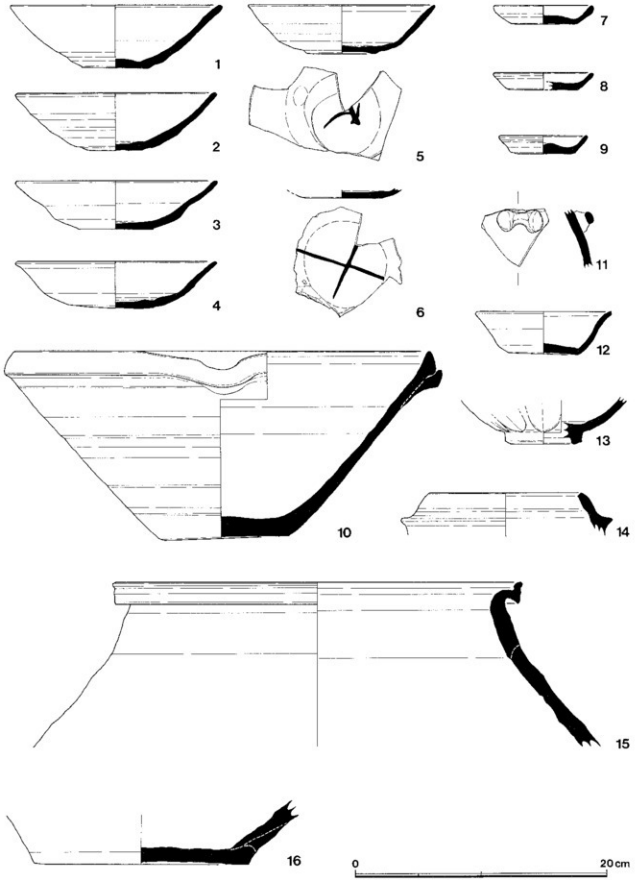


fig. 159　SB01 とその関連遺構出土遺物実測図（1～10：須恵器　11：灰釉陶器　12：白磁　13：青磁　14：瓦器　15・16：常滑焼）

fig. 160　SB03

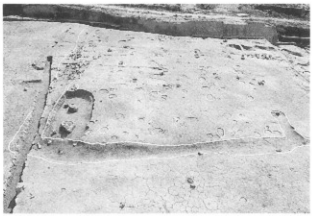


fig. 161　SB08（SB05～07）

SB04　SB01の南辺に接する掘立柱建物 SB04は柱間南北3間×東西2間（6.6×4.6 m）の規模で、主軸を21°にもつ。この建物の床面は外周の柱の内側で遺構確認面よりも一段約15㎝下がり土間となっている。SD10の東の延長上、SB01の南辺に接する部分には上面をそろえてこぶし大の石が敷かれる。北西部は土間の立ち上がりが切れ、SD10にそのままつながっていく。床面に敷かれていたと思われる薬状の植物遺体や焼けた礫・炭化材などが散乱していた。罹災後、この家の柱はすべて抜き取られている。

SB05～08　中段北半に位置する。少なくとも4棟がほぼ同じ位置で建て替えられているのが確認できた。建物の四周に雨落ち溝がめぐることから、少なくともその一つは入母屋式の屋根をもつと推定される。すべて南北4間×東西4間の建物である。出土遺物から12世紀から13世紀にかけての遺構であると判断される。

SB10　下段北半に位置する。柱間南北2間×東西3間（5.5×7.1 m）で主軸を9°にとる総柱の掘立柱建物。柱穴P3がSB04の柱穴P12と切り合い関係にあり、SB04の方が新しい。柱痕から柱は直径18㎝程度の断面円形であることが確認された。

出土遺物から12世紀の遺構であると判断される。

SB11　下段北半に位置する。柱間南北4間×東西3間（8.8×7.8 m）で主軸を19°にとる総柱の掘立柱建物。SB04と切り合い関係にあり、SB04の方が新しい。柱痕から柱は直径15㎝程度の断面円形であることが確認された。

SD01　下段を北東方向にのびる幅約1.5 m、遺構検出面からの深さ約70㎝の断面逆台形の素掘り溝。SD02と平行するようなかたちでのびるが、調査区の最北部でこれと重なり、この切り合い関係からSD01の方が古いことが判明した。SB01・02・03・SD04などの遺構もこの溝の埋没後のものである。

下段遺構面のベースとなる土層は古い河川の堆積土である。ベースが砂地の部分は掘削される溝の両側に杭が多く打たれる。覆土からは土器などのほか、板材・下駄などの木質遺物が出土した。遺物の出土状況にはかたよりがあり、2区・3区での遺物出土量は多いがその南、あるいは北では少ない。出土遺物から12世紀の遺構であると推定される。

SD02　下段の東端、中段との境の段に沿ってのびる幅約1.2 m、遺構検出面からの深さ約50㎝の断面逆台形の素掘り溝。SB01・04などはこの溝の埋没後に建てられ、SD01はこの溝よりも古い。覆土は砂質の部分もあるが、有機分の多いよどみ堆積の砂質粘土がほとんど

で、この中から多量の遺物が投棄されたようなかたちで出土している。土器・石鍋などのほか、板材・木簡・下駄・櫛・箸・鍬・曲物・木錘などの木質遺物がある。出土遺物から12世紀の遺構であると推定される。

SD10　幅約2m、遺構確認面からの深さ約30cmをはかる。溝内にはSB01の材が焼け落ちている。SD10に落ち込んでいる炭化材等を除去するとその下からSB01の南端の柱列が検出され、SB04の石敷きの下面からも南縁の柱穴が確認され、改築によって南辺の縁が外されていることが判明した。おそらくSB01の南東にSB04を増築するにともなって、南辺の縁を外し、SD10を掘削したものと思われる。このほかの部分でも縁あるいは廂の改築をおこなっている痕跡が確認された。すなわちSB01の北辺では雨落ち溝が3条ないし4条確認されている。SB01焼失時の炭化材が確認されたのはSD06であり、これに重なり、炭化材下から検出された柱穴列はそれ以前の縁あるいは廂のもので、SD05はこれに対応する雨落ち溝であると考えられる。雨落ち溝はさらに1条以上があり、数次にわたって縁あるいは廂の改築ないし屋根の葺き替えがあったと考えられる。

SK01　SB01の北西にある甕を掘えた土坑。大型の甕2つが東西に並べて据えられる。焼失時に崩落してきた家屋材によって押しつぶされている。壊れた甕のなかには焼土・炭化材の下にゴザのような植物の編み物残片が炭化して遺存していた。壊れた時に飛んだのか、あるいは罹災後の片付けの際に動かされたのかこの甕の破片はかなり離れた地点からも出土している。

fig. 162　SK01遺物出土状況平面図

fig. 163　SK11平面図

fig. 164　SK01

fig. 165　SK11

SK11　北半中段にある土壙墓。105×60cmの隅円方形を呈し、その主軸は288°にある。遺物包含層直下で底面の炭・敷石があらわれる状況で、遺構確認面からの深さはほとんどない。SP440と切り合い関係にあり、これより新しい。底面には上面をそろえて偏平な石が敷かれる。石は火を受けた痕跡があり、石の間には炭が充満している。石の下には炭はなく、敷石の上で火を焚いたことがあきらかである。遺骸の焼き場と思われるが、遺骨は残っていない。敷石上面から須恵器椀が出土している。12世紀の遺物である。

SK13～15　北半中段にある土坑群。隅円の方形あるいは長方形を呈する深さ70cm程度の土坑3基が近接して掘削されている。SK13からは礫が少々、SK15からは礫・土器・木片がかたまって出土している。SK14からは礫・土器ともにあまり出土していない。この3基の土坑は主軸もほぼ共通しており、ほぼ同時期のものと考えてよいだろう。SK15から出土した土器は12世紀のものである。

ST01　北半中段にある土壙墓。135×75cmの不整楕円形を呈し、その主軸は350°にある。遺構検出面からの深さは約30cmある。底面は南端よりも北端が4cmほど高い。北端底面に長さ52cm、幅11cm、厚さ6cmの枕と思われる角柱状の木製品が置かれ、その上面、西端に漆塗りの布製品が遺存していた。烏帽子かと思われる。またその北やや上位に枕と併行して刃部を北、切っ先を東に向けて小刀が納められている。

fig. 166　ST01

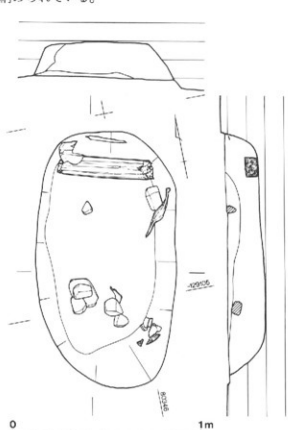


fig. 167　ST01 平面・断面図

SR01　調査区の北端を流下していく谷状の流路。上流部に堤（堤1）が築造され、貯水池として利用され、その下流にも小規模な貯水施設がつくられている（堰1）。

堤　1　調査区内の上流部、流れが北向きから西向きに屈曲する部分を利用して堤（堤1）が築

造される。堤の上面では余水吐が2条・護岸のために大きな木材を堤の上流側に埋め込んだ土坑1基が確認できた。溜め池部分に落ち込んだ自然木や堤に打ち込まれた杭などは良好な状態で遺存しているのにもかかわらず樋は確認されなかった。この堤には当初から樋は存在しなかったものと判断される。堤盛り土の最下面すなわち堤築造時の地面では板材を「木道」状に敷いてあるのが確認できた。

この堤の当初の盛り土内あるいは盛り土下からの遺物の出土はなく、この堤の築造された時期は明確にしがたい。ただし、修築の際の盛り土のなかから完形の坏が1個体出土しており、この土器は9世紀のものである。したがってこの堤がつくられた時期は9世紀あるいはそれ以前と推定される。

このほか、この谷の右岸、後に溜め池となる部分の底面に密着した状態で6世紀の須恵器蓋坏が出土している。溜め池築造以前の谷口における人の活動を示すものである。また、溜め池の堆積土からは12世紀代の遺物も出土している。このころまでいくらかは水を溜めるという機能を保っていた可能性が考えられるかも知れない。

堰　1　堤の下流にあたる傾斜地から八多川沿いの平地への地形がかわる谷口部分にも小規模な貯水施設がつくられている（堰1）。この堰およびその上流の貯水部分からは12世紀の土器や曲物が出土している。

下段の屋敷建物とほぼ同時期の遺物が出土することから、この堰・貯水施設はそれらに関連して存在したものであると推定できる。

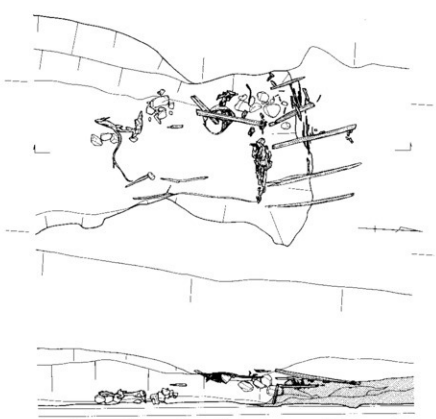


fig. 168
SR01 堰平面・断面立面図

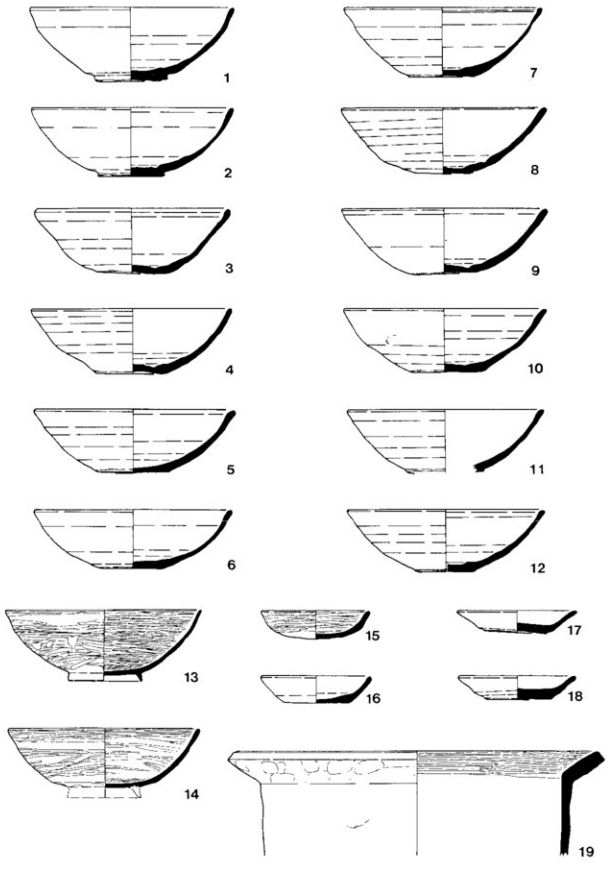


fig. 169　SD01 出土土器実測図（1～12・16～18：須恵器　13～15：瓦器　19：土師器）

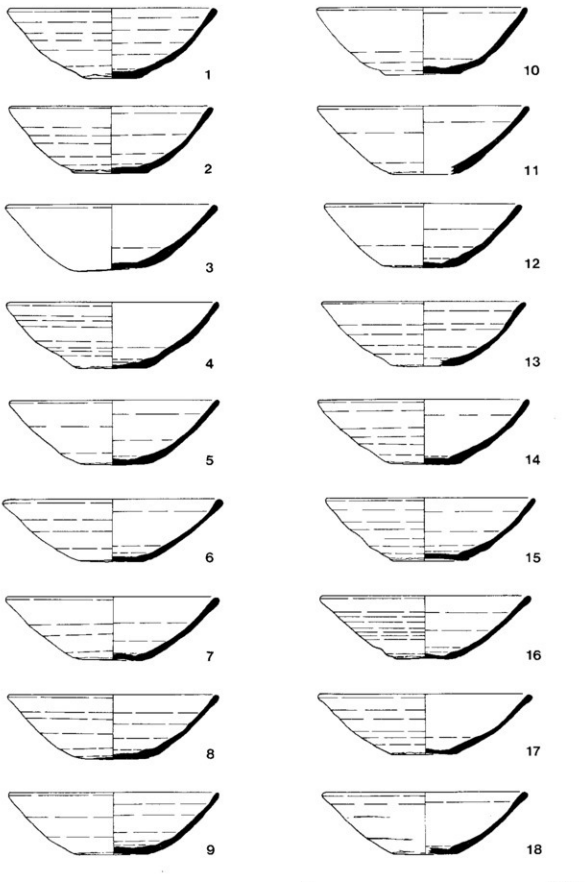


fig. 170　SD02 出土土器実測図(1)（1～18：須恵器）

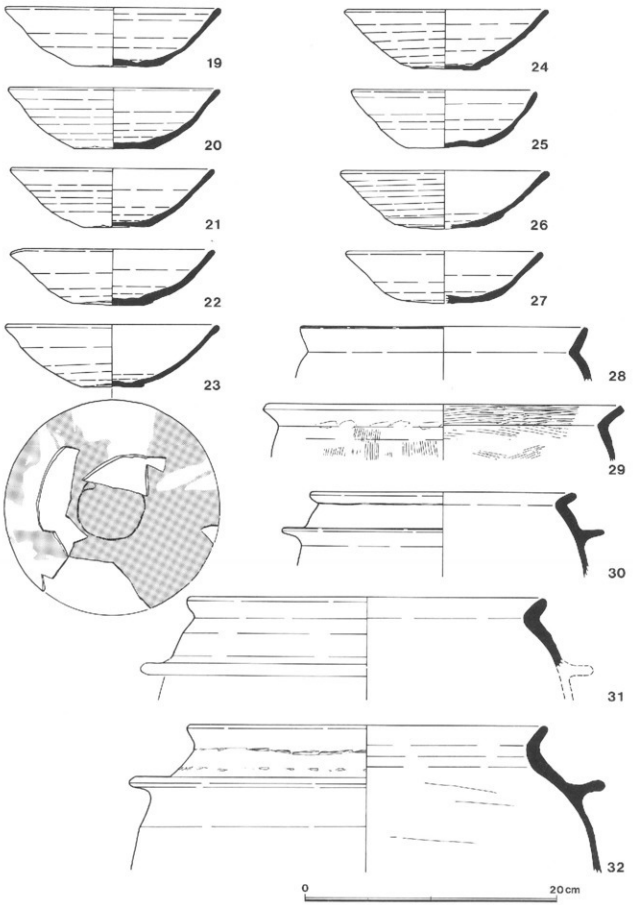


fig. 171　SD02 出土土器実測図(2)（19～27：須恵器　28～32：土師器　23：灯明皿として使用）

Ⅱ　区　　Ⅱ区では、Ⅰ区で確認された溝（SD02，SD31）が引き続き検出されている。また、Ⅰ区同様に掘立柱建物が確実なもので4棟確認された。掘立柱建物については、このほかにも柱穴が多数検出されていることから、未確認のものが存在している可能性が高い。ほかに、落ち込み・土坑・石敷遺構などが検出されている。

掘立柱建物　Ⅱ区については、調査地区内の平坦面を大きく上段と下段の2段に分けることができるが、掘立柱建物はその上段部に1棟（SB14）、下段部に3棟（SB12，13，15）が確認された。

SB12　東西4間×南北3間の総柱の建物の南側に1間分の張り出し部（ただし西側の1本分を欠く）を持つものである。この張り出し部については、南側にあることから廂である可能性はある。

SB13　SB12の南側に隣接するように位置する、東西3間×南北2間の小型の総柱の建物である。溝（SD02，SD31）と切り合い関係が認められ、どちらの溝よりも新しいことから、この建物群の中では時期的に後出するものと考えられる。

SB14　唯一上段部で確認されたものであるが、東西3間×南北2間の建物の南側に1間分よりやや短い張り出し部があり、その南にさらに半間分の柱列が存在することから、南側に縁と廂を持っていたものと考えられる。また北側と東側にも半間分の柱列が存在することから、廂があったものと推定される。これは、北側と東側には雨落ち溝が存在していることと矛盾しない。南側で確認された溝については、やや間が離れていることから若干の疑問の余地は残るものの、この溝の東側がややカーブして終わっていることから、本来建物東側の溝と南側の溝がつながっていた可能性もある。

SB15　東西3間×南北4間の総柱の建物である。この建物は、浅い落ち込み（SX18）を掘削した段階で確認できたものである。この建物の東側には柵列（SA01）の可能性のある小ピットが存在している。

溝　Ⅱ区では約20条検出されているが、主なものはⅠ区に続くSD02、SD31がある。切り合い関係から、SD02はSD31よりも後出することがⅠ区の調査で明らかにされている。

SD31　SD02の西側でほぼ並行するように検出されている。この溝からは遺物の出土は少ないが、SB12の下になるあたりの溝の埋土の最上層から土器がまとまって出土している。遺物の時期については、切り合い関係の認められるSD02から出土する遺物と大きな隔たりは認められない。

土　坑　土坑は約20基が確認されている。以下、主なものについてみてみる。

SK38　上段部で確認された一辺2m、深さ5cmの方形の浅い土坑である。埋土には、拳大から人頭大の礫が約20個置かれていた。しかし、遺物はなく、その時期については明確でない。

SK41　上段部で確認された一辺3m、深さ40cmの不整方形の土坑である。一部攪乱を受けてはいたものの、埋土には、拳大から人頭大の礫がぎっしりと詰められ、その隙間に土器の小片が混在していた。出土した遺物から、鎌倉時代後半段階の土坑と考えられる。

石敷遺構　SX17は、浅い落ち込みSX18の上面で確認されたものである。東側に攪乱を受けているが、長辺1.5m、短辺0.7mの炭層の範囲の中に、上面が平坦になるよう南側を中心にして礫を敷きつめた遺構である。この礫の上面は熱を受け赤黒く変色していた。用途につ

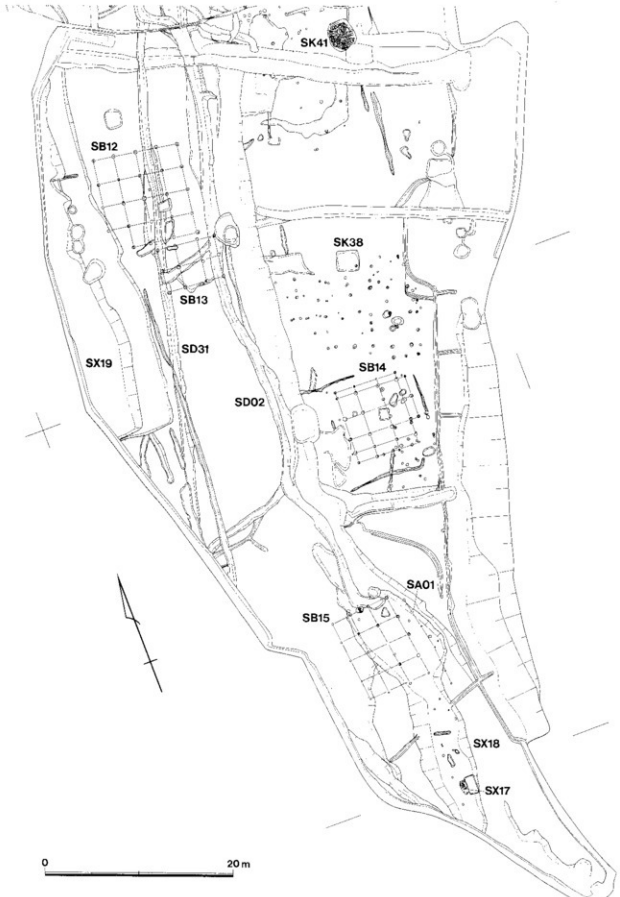


fig. 172　Ⅱ区遺構平面図

いては明確でないが、火葬に用いられた遺構の可能性もある。ただし、調査中には、火葬の際によく観察される人骨の小片などは確認できていない。

落ち込み　SX18やSX20のように浅いものが主体であるが、調査区の西側で確認されたSX19は西側（八多川）に向かって下がっていくもので、調査範囲内で最も深い部分は約1mにおよぶ。八多川の氾濫原の可能性もあるが、この落ち込みの傾斜面に拳大の礫が集中する個所が認められた。この礫に混在して、須恵器の塊の完形品が数個体出土している。時期的には、SD02などの多量に出土する遺物群よりも若干先行する可能性が考えられる。

時　期　出土した遺物の時間幅は概ねすべて鎌倉時代の中におさまるものである。そのなかで、遺構の切り合い関係などから時間差が認められるものが若干ある。掘立柱建物SB13は、溝SD02とSD31よりも新しいものである。また、SD31はSD02に先行する溝である。これらから、時間的には（古）SD31→SD02→SB13（新）といった変遷が追え、この集落には最低3時期の時間差が認められることになる。しかし、SX31とSD02から出土した遺物には大きな時間的な隔たりは認められないことから、短時間の間にSD31からSD02への掘り替えがなされたものと考えられる。

この SD31 と SD02 は、丘陵から押し出してくる水の排水などの用途を意識した溝の可能性が考えられ、この集落は当初段丘の上段部に成立したものが、その後排水溝 SD31・SD02 によって、その集落域を下段部にまで拡げていった過程が窺える。

3．まとめ

今回の調査で平安時代末から鎌倉時代にかけての大型建物跡 SB01 が検出され、上小名田の地において平安時代中頃・後期にひきつづいてこの時期にも大型の建物が建てられていることが確認された。

先に述べたように上小名田における以前の調査で床面積70坪をこえる10世紀代の建物が確認されており、これが今までの神戸市内における遺跡で確認された最大の掘立柱建物であった。今回検出された SB01 は、おそらくこれを上回る80坪程度あるものと推定される。これは全国的にみても上位にはいる規模であろう。

市内における大規模建物の一位と二位が継続するようなかたちで上小名田において建築される。平安時代中頃から鎌倉時代に至るまでのあいだ上小名田の地に有力者の住まいがあるということは、ここが八多川流域のなかで中核的な位置をながいあいだ保ちつづけていたということである。また、丸鞆の出土はこれらの屋敷の主のなかに公的な身分をもった人間、官人がいたということを示している。

このように文献には残されていない当地における在地有力層の動向についての良好な資料を発掘調査によって得ることができた。今後当地における発掘事例が増せば畿内周辺域における一在地有力層の消長を知るためのきわめて良質の検討材料となりうるだろう。

遺物については、溝などから大量の土器が出土しているが、このほかに木簡・下駄・櫛・箸・鍬・曲物・木錘などの木器類はここで暮らした人々の具体的な生活の一面を彷彿とさせる。木簡は判読できない部分があるのが惜しまれるが、まじないに関連する文句がみられ、当時の信仰生活のありかたがほのみえてくるようである。

ところで、『上小名田館』というものがこの地にあったと記録にみえる。いつごろ、どこに存在したか、主はだれかなどという具体的な情報は、残念ながら伝わってはいない。

しかし少なくとも三百年にわたり大型の建物が継続して存在したということがこれまでの発掘調査の結果によって明らかになっており、そのうちの一つが『上小名田館』である可能性も考えられる。あるいはそうでないにしても発掘調査によって確認されたこれらの屋敷は伝承にいう上小名田館の主に系譜をひく人々のすまいである可能性が高いだろう。今後の調査の進展が期待される。

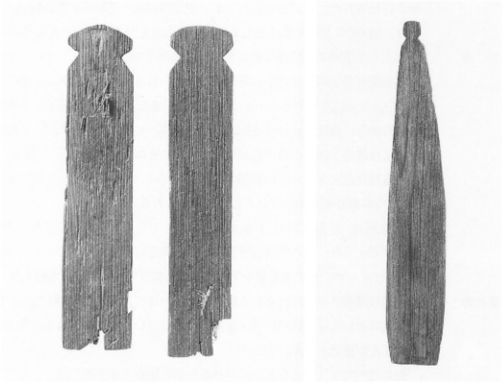


fig. 173
SD02 出土　木簡

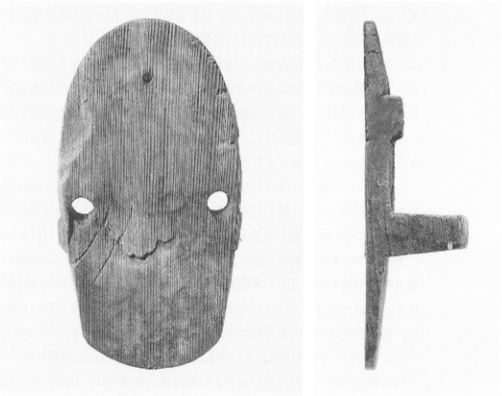


fig. 174
SD02 出土　下駄

31. 神楽遺跡　第9次調査

1．はじめに

平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災は、市域の施設に甚大な被害をもたらした。今回の神楽遺跡の調査は、被災地における工場建設を伴うものであり、「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針」（以下「基本方針」と称する）に基づいて行ったものである。

神楽遺跡は長田区神楽町に所在し、新湊川・妙法寺川によって形成された沖積地上に立地する。昭和54年から現在までに8次にわたる調査が実施され、弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが判明している。今回の調査地は、古墳時代の井戸や古代の掘立柱建物群の検出された第4次調査地の北側に隣接しており、工事による掘削が遺構面に及ぶ可能性が想定されたために、事前の発掘調査を行った。

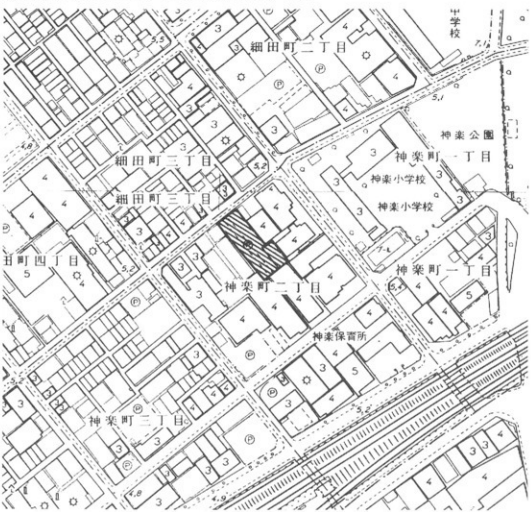


fig. 175
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査方法

当初、調査対象範囲は約100㎡の地下施設用地（掘削深度3.25ｍ）と、建物の基礎（同1.5ｍ）、地中梁（同1.2ｍ）の埋設箇所全てを予定していた。梁部分はトレンチ状の調査区となるので、便宜的に東西方向の5本を北から順にＮ1～Ｎ5、南北方向の3本を東から順にＥ1～Ｅ3と命名した。交点にあたる基礎部分は交差する梁の番号を連ねて、例えばＮ1－Ｅ1と呼称することにした。

こうしてまずＮ１、Ｎ５、Ｅ３の各梁部分から調査に入ったのであるが、包含層の上面が梁深度と同じく地表下1.2ｍ程度であり、しかもこの面上では遺構が検出されなかったため、「基本方針」に従い他の梁は調査対象から除外した。このため、全面調査とはいえかなり変則的な調査区となっている。

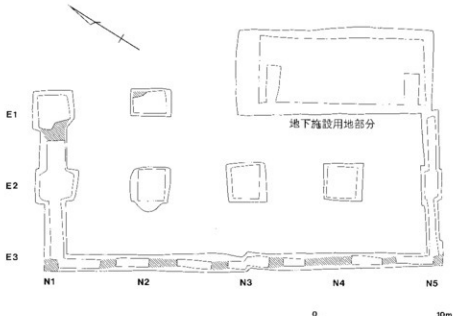


fig. 176　調査区位置図

基本層序　調査地の基本層序は７層に大別される。以下各層の概要を述べていく。

Ⅰ層　造成土および瓦礫を大量に含む現代の攪乱層。

Ⅱ層　灰褐色シルト質土層。グライ化進むことから旧水田の耕作土と考えられる。

Ⅲ層　褐色シルト質土層。旧水田の床土であろう。

この層までを重機によって掘削した。

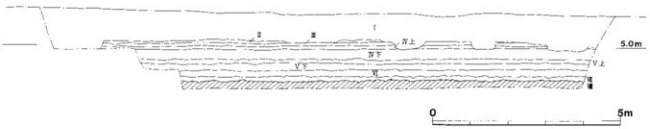


fig. 177　地下施設用地部分土層断面図

Ⅳ層　褐色砂質シルト層。細砂を含む。洪水砂と考えられ、古墳時代～中世の遺物が若干出土した。当層以下は１層ずつ手作業で掘り下げ、層毎の遺物取り上げと各層上面での遺構検出を行った。当層は砂粒の多少によって（Ⅳ上＝砂粒多し。Ⅳ下＝砂粒少なし。）細分した。

Ⅴ層　淡灰褐色シルト質土層。鉄分が沈着し、褐色味がやや強い。古墳時代から中世の遺物を包含するが、主体は古代から中世である。当層は色調によって（下部ほど鉄分の沈着が顕著である。）細分したが、この2層は漸移している。

Ⅵ層　暗灰褐色粘質土層。主として古墳時代の遺物を包含する。

Ⅶ層　黒灰色粘質土層。古墳時代の土師器片を少量包含するが、全て小片である。

Ⅷ層　灰褐色粘質土層。下層の堆積状況を把握するために、3か所にトレンチを設定して深堀りしてみたが、以下遺構、遺物は全く認められず、当層の上面までを調査対象とした。

Ⅱ層以下の各層は水平な堆積をみせ、調査区の全域において層のレベルはほぼ一定であった。特にⅤ層以下については孔隙も発達せず、分解は進んでいないようである。滞水の浸る状況下でこれらの堆積は行われたようであり、調査地は生活域には適していなかったものと考えられる。

遺　構

検出した遺構は、Ⅳ層上面の近・現代の溝と、Ⅴ層上面の犂跡状遺跡（中世か）のみで、予想されていたような古墳時代～古代に遡る遺構は全く発見できなかった。

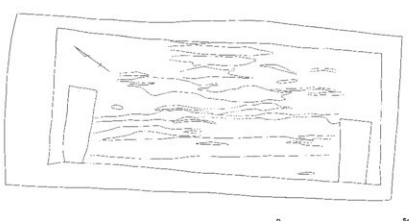


fig. 178　地下施設用地部分Ⅴ層上面検出遺構平面図

遺　物

遺物は若干の遺構出土のものを除いて全て包含層からの出土で、大部分は小片となっている。

1・2はⅦ層出土の遺物である。どちらも土師器甕ないし壺の肩部破片と考えられるが、小片のため径は不明。

3・4はⅥ層からの出土遺物である。3は土師器甕の肩部破片で、外を粗い縦刷毛、内部を横刷毛で調整する。4は須恵器甕の胴部破片で、外面に格子状、内面に同心円状の叩き目を有する。

5～12がⅤ層出土遺物である。5は頂部に宝珠つまみの付く須恵器蓋で、造りは重厚であり壺の蓋の可能性もある。6は須恵器坏身の高台部。7・8は土師器坏である。体部上半は外反し、口縁端部内面には1条の細い凹線が巡る。これら4点は奈良時代の遺物と思われる。

9は土師質土器の小皿で、口径9.6㎝を測る。10は和泉型瓦器埦で、見込みには平行線状の暗文が施され、断面三角形の退化した高台を有する。11は東播系須恵器のこね鉢で、口縁端部は上下に拡張する。9～11は中世の遺物であり、特に10・11はその形態上の特徴から13世紀後半に位置付けられる。12は管状土錘である。

13～17はⅣ層出土遺物である。13は備前焼の擂鉢口縁部で、間壁編年のⅣ期、室町時代後半に比定される。14は外面の口縁部下に突帯の巡る土師質の容器であるが、器種は不明。15は龍泉窯系青磁碗で、外面に鏑蓮弁文をもつ13世紀代のものである。16・17は、当層中より多量に出土した焼土塊のうちの2点である。これらの焼土塊は大小のばらつきが大きく、人為的な加工の痕跡もほとんどないが、一部には図示した2点のように平坦面をもつものも見られる。分布状況にも規則性はなく、その性格は判然としない。

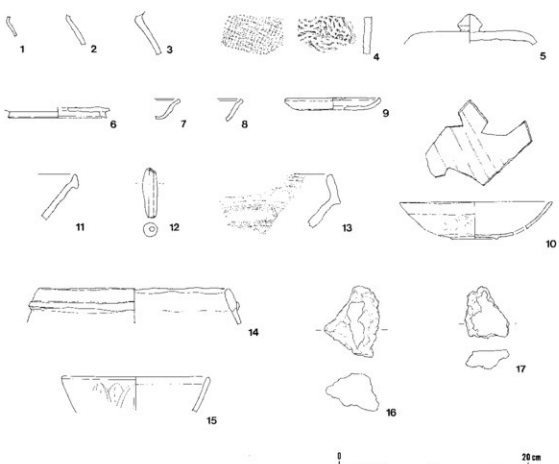


fig. 179　出土遺物実測図

3．まとめ

今回の調査では、従来の調査で検出されている古墳時代～古代の住居跡等は全く見られなかった。既往の調査結果を参照してみると、南側の第4次調査地では遺構の多くは南半部に集中しており、北半部には若干の溝や土坑が点在するのみである。また、南東に位置する第5次調査地も、全体としては遺構密度は低いと考えられる。隣接地のこうした状況を考慮すれば、今回の調査地も同様に遺跡の中心部を外れた箇所に相当すると結論でき、その意味では神楽遺跡の範囲を確定する上での一つの材料を提供したと言えよう。

32. 長田野田（ながたのだ）遺跡　第１次調査

１．はじめに

長田野田遺跡は、阪神・淡路大震災の復興に伴う共同住宅（マンション）建設に先立ち、震災後の平成７年５月の試掘調査により発見された遺跡である。妙法寺川の左岸に位置し、標高は3.5ｍ前後を測る。本遺跡の東側には二葉町遺跡（奈良・中世）、西側には本庄町遺跡（弥生）がそれぞれ近在していることもあり、試掘調査の結果をもとに全面調査を行うこととなった。

fig. 180
調査地位置図
1：2,500

２．調査の概要

基本層序は第１層表土、第２層暗褐色シルト混砂質土、第３層灰褐色シルト混砂質土であり、第３層が中世の遺構面となる。またこの面には部分的に奈良時代の遺物を含む黒色粘質土が堆積しており、その下でも遺構が発見されている。したがって今回の調査では部分的に２面の文化層が認められたことになる。上層面では、鎌倉～室町時代にかけての溝（SD）４条、土坑（SK）20基、竪穴状遺構（SX）１基、ピット群が、下層面では奈良時代の掘立柱建物（SB）が１棟、柱列（SA）１条、井戸（SE）２基、ピット群が発見された。ただし、SBおよびSA一帯には黒色粘質土はなく、上層面で検出されている。なお、排土を置く都合上、調査区を南と北に分け、南区から調査を行い反転する形態をとった。以下、主な遺構について略述する。

fig. 181　遺構平面図

SD01　幅3.0～3.5 m、深さは遺構検出面から90～95cmを測る。条里の方向に沿って調査区南側を東西に走り、13～14世紀にかけての土師器の皿・鍋や東播系須恵器の甕・捏鉢、陶器の甕などが出土している。また8世紀の須恵器が入っており、この時期に開掘された可能性があり、14世紀後半に埋没したものとみられる。他の溝は浅く、遺物もほとんど出土していない。

SK02　土坑の中では規模が大きく、東西5.0 m、南北2.3 mの楕円形で、深さは80cmを測る。遺物には土師器の皿、陶器の甕、漆塗りの椀などがあった。

SX01　一辺が3.5 mの隅円方形で、深さは11cmと浅いが、遺物は土師器の皿、東播系須恵器の捏鉢などのほか、礫が多数出土している。性格については不明である。

ピット　150基以上が確認されているが、建物の柱穴になるようなものは認められない。遺物も土師器の小片がほとんどであるが、中には土師器の皿や、最終末の瓦器塊が出土したものがある。

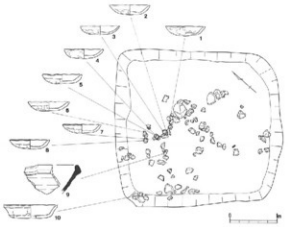


fig. 182　SX01平面図（土器は1／6）

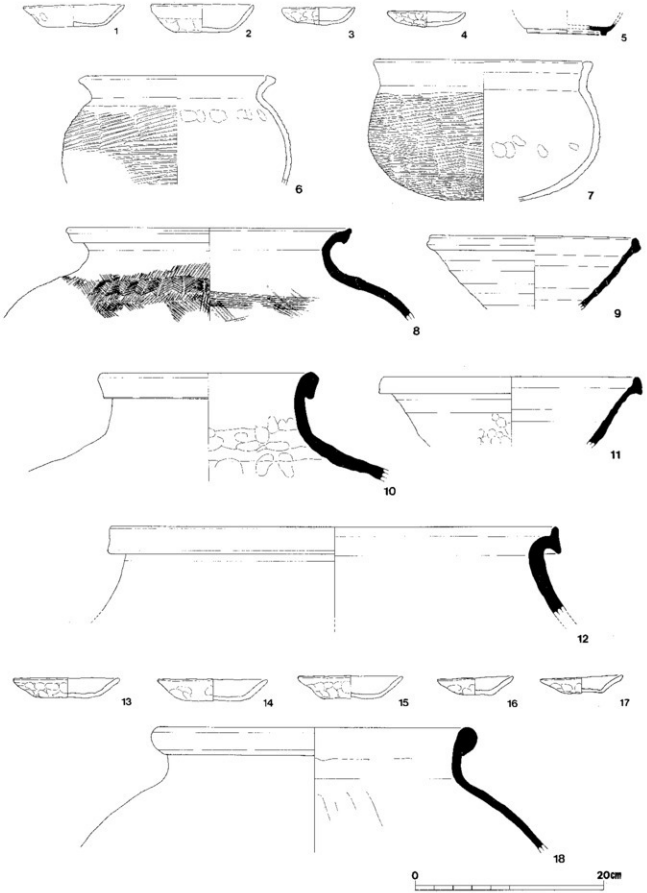


fig. 183　出土土器実測図（1～12：SD01　13～18：SK02）

SB01　SD01の南側で発見され、柱穴はともに一辺が50～60cmの方形、深さ25～80cmの掘形で、東西2間（柱間2.1 m）、南北1間（柱間2.0 m）以上の規模を持つ。

SA01　SB01同様柱穴は一辺が50～60cmの方形、深さ25～80cmの掘形で、柱根が残っているものもあった。柱間1.8～2.1 mを測る。SD01に沿っており、両者の関連を窺わせる。柱穴からは土師器の坏・皿が出土しており、周辺にも土師器・須恵器が出土したピットがある。

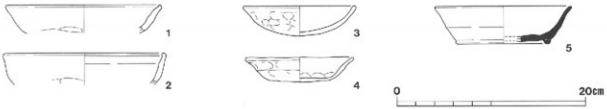


fig. 184　出土土器実測図（1・2：SA01　3～5：ピット）

SE01　調査区中央のやや北側、黒色粘質土を掘り下げたところ発見された。東西2.1 m、南北1.5 m、深さ1.2 mの楕円形の掘形である。木枠を蒸籠積みにしたものであったとみられ、廃棄する際に最下部の木枠を残し、土師器の皿や須恵器の甕・壺や、飯蛸壺・土錘・製塩土器などの漁具を投げ込んだものと考えられる。木枠の遺存状況は良好であった。

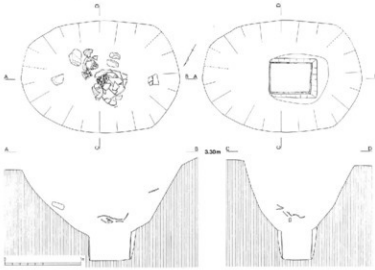


fig. 185　SE01平面・断面図

fig. 186　SE01遺物出土状況

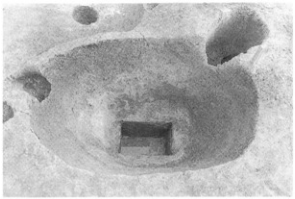


fig. 187　SE01最下層木枠出土状況

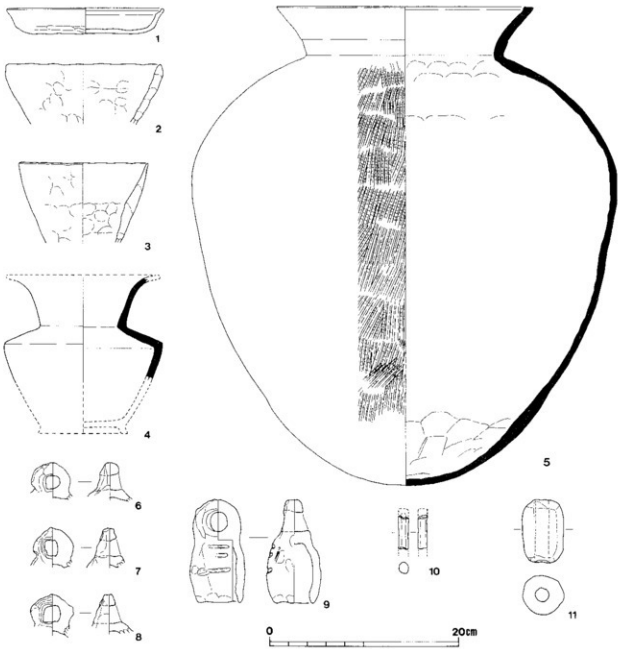


fig. 188　SE01 出土遺物実測図

SE02　SE01の北西に位置する。東西2.8 m、南北2.1 m、深さ1.1 mの楕円形の掘形で、SE01同様に最下部の木枠のみを残して廃棄されていたが、この井戸には底に礫が敷いてあった。土師器の坏・皿、須恵器の蓋・坏が出土している。

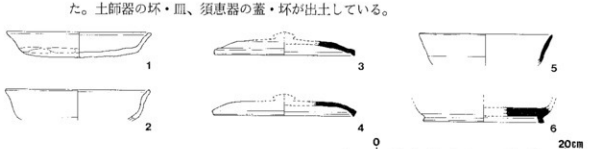


fig. 189　SE02 出土土器実測図

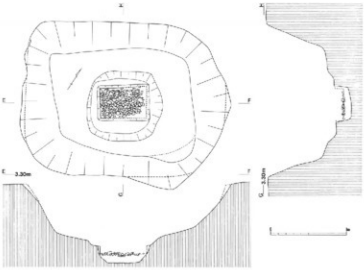


fig. 190　SE02 平面・断面図

fig. 191　SE02

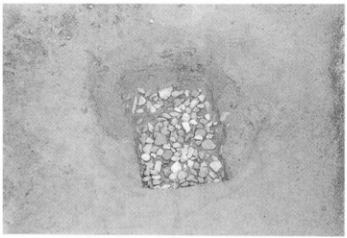


fig. 192　SE02 下層礫敷

3．まとめ　　今回調査された2面の文化層からは、いくつかの情報を得ることができた。特に奈良時代の建物跡・柱列については、その配置・規模からも、該期における公的な建物の一部とも考えられ、この地域での位置付けが注目される。また中世の遺構・遺物についても、ごく近くに集落の存在を窺わせるものであり、今後は周辺の遺跡の調査の状況、また条里との関わりとも合わせて検討することが必要である。

33. 戎町遺跡　第16次調査

1．はじめに

戎町遺跡は妙法寺川が形成した扇状地先端部に立地する遺跡である。昭和63年に今回の調査地点から北へ約150ｍの所で、弥生時代前期の水田を検出したことに始まり、現在まで合計15回の調査で、縄文時代晩期から中世までの複合遺跡であることが明らかとなっている。中でも弥生時代の遺構・遺物は、他の時代のものと比較して質・両共に抜きんでており、浜津西端の拠点集落であったと考えられる。

今回の調査は、震災に伴う個人住宅の再建計画が出されたことを受け、試掘調査を実施した。その結果工事によって埋蔵文化財が影響を受ける、約４ｍ×約９ｍの範囲に関し、発掘調査を実施することとなった。調査の方法は重機掘削の後、人力で細部の精査を行ったが、掘削土の置き場の関係上、調査範囲を東西に分割し、２回に分けて実施した。また調査は工事影響深度までで終了した。重機掘削の排土は、敷地外に仮置きし、調査終了後に元通り埋め戻した。

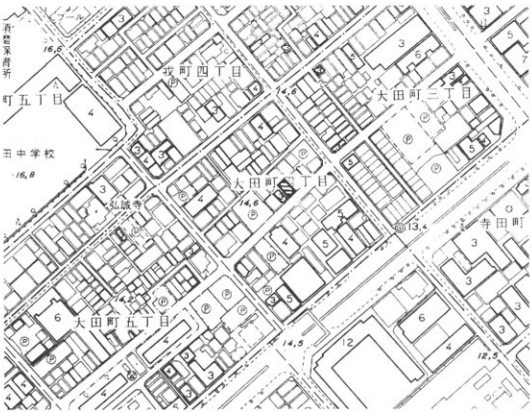


fig. 193
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

層　序

基本層序は現地表面下から、現代の造成土・攪乱、近代頃の旧耕作土、近世頃の旧耕作土と思われる淡黄褐色粘質土、淡褐灰色粘質土、淡灰色砂質土、中世頃の旧耕作土と思われる淡黄褐色粘質土、淡黄灰色土、遺物包含層である暗灰色砂質土、暗黄灰色粘質土、灰色砂混じり粘土と続く。淡黄褐色粘質土上で中世頃の、暗黄灰色粘質土上で古墳時代頃の溝を、それぞれ検出した。また遺構は検出できなかったが、出土遺物や周辺での調査成果から、暗灰色砂質土上は平安時代頃の、灰色砂混じり粘土上は弥生時代頃の面である可能性がある。

遺　構　　淡黄褐色粘質土上で中世頃の溝を２条検出した。２条とも幅80cm、深さ10cmで、埋土は北側が淡茶灰色土、南側が淡灰色土である。耕作時に形成されたものと思われる。

暗黄灰色粘質土上で古墳時代頃の溝を１条検出した。幅0.8～1.3ｍで、発掘区の中央で少し南へ折れている。溝の北側の傾斜は緩やかであるが、南側の傾斜はほぼ垂直で、断面形は片薬研状となり、深さは25cmである。埋土は暗灰茶色粘質土で、古墳時代の土師器片が少量出土した。

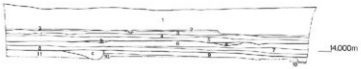
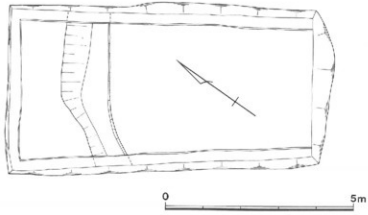


fig. 194　調査区平面・断面図

1　現代造成土・攪乱
2　近代以降作土
3　近世以降作土　淡黄褐色粘質土
4　近世以降作土　淡褐灰色粘質土
5　近世以降作土　淡灰色砂質土
6　中世以降作土　淡黄褐色粘質土　←中世遺構面
7　中世以降作土　淡黄灰色土
8　遺物包含層　暗灰色砂質土　←平安時代遺構面？
9　遺物包含層　暗黄灰色粘質土　←古墳時代遺構面
10　遺物包含層　灰色砂混じり粘土　←弥生時代遺構面？
11　淡褐色砂
a　溝（中世）埋土　淡茶灰色土
b　溝（中世）埋土　淡灰色土
c　溝（古墳時代）埋土　暗灰茶色粘質土



３．まとめ

今回の調査では溝を３条検出したに過ぎないが、周辺の調査では各時期の遺構が検出され、遺物が出土している。調査中は湧水が激しかったこともあり、本調査地点周辺は、地形上若干低地であったと思われる。また、調査面積の関係もあって畦畔等は検出できなかったが、灰色砂混じり粘土は土質から弥生時代の水田耕作土の可能性があると思われる。したがって今後近くで発掘調査を実施する時、弥生時代の水田を検出することもあると考えられる。

fig. 195　調査地全景

34. 戎町遺跡　第17次調査

1．はじめに

調査地は妙法寺川左岸に位置し、現地表で標高約 14.7 mの扇状地末端からやや南の沖積地に移行する地点にあたる。現在の海岸線までは約 1.5 kmである。

戎町遺跡ではこれまで16次に及ぶ発掘調査が実施されている。その結果、縄文時代晩期から弥生時代を中心にして、古墳時代前期や中世の遺構も確認されている。しかし、その中心はこれまでの調査の遺構の検出状況や、遺物の出土量から判断すると弥生時代前期から中期を戎町遺跡の中心時期と捉えうる状況にある。しかし、この遺跡が市街地の中に埋没しているために、その各次の調査面積は小規模なものが多く、各調査ごとの関連を追求するまでには至っていない。

このような状況下、今回の調査地点は第１次調査地点の北側に隣接する地点にあたり、弥生時代の生活面が４面遺存していることが考えられる地点であった。しかし、建築物の基礎が影響を及ぼす範囲に限定して調査を実施したため、第１次調査の第４遺構面については調査を実施しておらず、また、第３遺構面についてはその一部を調査したのみで、河道についてはプランを検出したにとどまり、精査は実施していない。また、基礎工事の行われない部分は調査せず保存している。

fig. 196
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

第１層（盛土）、第２層（床土）、第３層（褐灰色シルト）、第４層（黒色シルト）、第５層（黒褐色砂質土）、第６層（灰色シルト～細砂）、第７層（洪水砂）、第８層（緑黒色シルト）、第９層（青灰色シルト）となるが、調査は概ね第８層の途中で終了している。この中では、第４層が弥生時代中期から庄内期の遺物包含層で、第５層は弥生時代中期の

遺物包含層である。この第5層上面が庄内期の遺構面である第1遺構面になる。そして第6層上面が弥生時代中期の遺構面である第2遺構面になる。第7層は第1次調査でも同様であったが、遺物を含まない砂層（洪水砂）である。第8層は弥生時代前期の遺物包含層で、第9層上面が第3遺構面になる。

第3遺構面　第9層上面（標高約12.8m前後）で検出した遺構面である。基礎の掘削深度との関係から調査区全面を調査することはできなかったが、遺構面を検出した部分で、ピット3個と第1次調査でも検出されている河道のプランを確認することができた。この河道の上面から弥生時代前期後半の遺物が少量出土している。

fig. 197　第3遺構面平面図

第2遺構面　第6層上面（標高約13.5m前後）で検出した遺構面である。検出された遺構には竪穴住居1棟、土器棺（壺棺）1基のほか落ち込み・土坑・ピット・溝などがある。

SB101　竪穴住居（SB101）は、第1次調査の際に南半部が調査されているが、今回の調査でほぼその全体が明らかになり、長径約5m、短径約4mで、北西から南東に長い楕円形の住居址となった。今回検出分では南西隅に直径約1mの不整円形の土坑が1基あり、少量の土器が出土している。また、前回の調査で指摘された明確な柱痕が認められない状況は今回も追認され、ピットが2個1対になる状況は今回も確認されており、建て替えの可能性が高い。柱は前回の報告どおり6本柱であったと考えられる。住居址の埋土から遺物の出土は少なく、床面においても同様である。しかし、土坑から出土した土器は、中期中頃のものと考えられ、住居址の時期もそのころのものと判断される。

SK101　壺棺（SK101）は、まず壺を正置し、その口縁部に2個体分の甕の体部片で蓋をするものである。壺棺内の土はすべて洗浄し、篩にかけたが副葬品等は確認されていない。弥生時代中期中頃のものである。竪穴住居の西側約3.5mのところで検出されており、住居址との何らかの関連も留意される。

SX101　調査区の東側で検出された落ち込み（SX101）は深さ約10cm程度であるが、この落ち込みの上面で土器群Ⅰと土器群Ⅱが検出されている。この落ち込みを掘削した段階で、長径約2.5m、短径1.5m、深さ約40cmの楕円形の土坑（SK119）が検出された。この土坑からは比較的まとまって弥生時代中期の土器が出土している。このSX101上面の土器群Ⅰ・ⅡとSK119の土器は前後関係が明確で、弥生時代中期の土器編年を考えていく上で貴重な資料となるかもしれない。

SK119

ピット　ピットの中には柱材を遺存しているものも存在しており、掘立柱建物などが存在していた可能性が高いが、調査区が限定されているために明確にすることはできなかった。

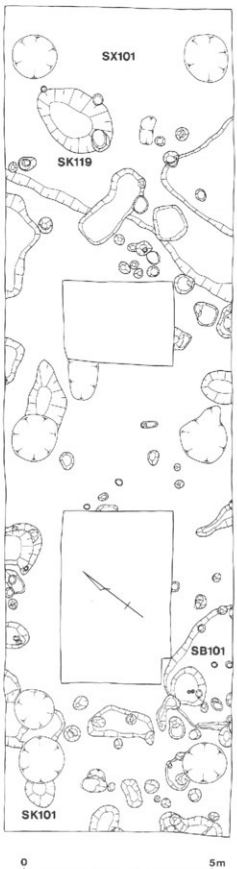


fig. 198　第 2 遺構面平面図

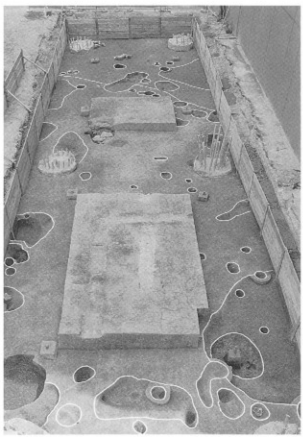


fig. 199　第 2 遺構面全景

fig. 200　第 2 遺構面土器群 I

fig. 201　土器棺墓（SK101）半截状況

第1遺構面　第5層上面（標高約13.7 m前後）で検出した遺構面である。検出された遺構は土坑2基、ピット4個である。

土　坑　土坑2基は、いずれも調査地区外に広がるために規模等は不明確である。埋土から遺物の出土がないために時期については明らかでないが、第1次調査の結果や上層の包含層である第4層から出土した庄内期と推定される甕の完形品などから、やはり庄内期の遺構面であると考えられる。

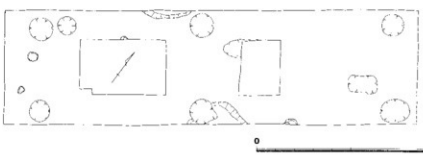


fig. 202　第1遺構面平面図

出土遺物　今回の調査でも多量の遺物が出土しているが、その多くは未整理であるため各遺構等から出土した遺物を詳細には検討できていない。しかし、その傾向について検討を行うと、第3遺構面に伴う遺物は多くないが、第1次調査同様に河道の岸付近で完形品に近い土器が数点出土したり、河道の上面にも同様に遺物がみられた。時期については、前期の新段階のもののみでそれ以前に遡るようなものはみられない。

次に第2遺構面に伴う土器であるが、これらは畿内第Ⅲ様式を中心に一部第Ⅳ様式に下る土器が少量みられるものの、凹線文出現以前段階（第Ⅲ様式段階）の時期を与えられるものが主体となる。

また、第2遺構面に伴う遺物包含層である第5層からは、土器の他に多くのサヌカイト片や石器片が出土している。製品としてはサヌカイト製石鏃や石庖丁・石斧などがある。また、軽石も第1次調査同様に数点出土しているが、加工品は確認されなかった。

第1遺構面は庄内併行期と考えられるが、庄内期の遺物量は多くはない。それは、この面の遺構が希薄なことと関連してるものと考えられる。

3．まとめ　今回の調査においても、弥生時代中期の遺構・遺物が多量に検出された。これは、これまで調査されてきた内容と符合する結果である。この調査地付近の戎町遺跡の中心時期の一つが弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）であることを物語るものである。しかし、その前後の時期の第Ⅱ・Ⅳ様式の遺構・遺物は希薄で、集落が何らかの要因で地点を変えて営まれていることが考えられる。

また、今回壺棺が検出されているが、これは竪穴住居に近接して埋葬されたもので、この時代の葬送儀礼の一端を知る手がかりとなり、集落域の中に葬られた被葬者を考えていく上でも貴重な資料である。

35. 戎町（えびすちょう）遺跡　第20次調査

1．はじめに

今回の調査地点は昭和63年（第３次調査）および平成元年（第４次調査）に発掘調査を実施した地点の北側（８ｍ道路を隔てて）に隣接する地点にあたり、前回の調査では古墳時代から弥生時代の生活面が７面調査されている。

fig. 203
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

第１層（盛土）、第２層（旧耕土）、第３層（旧床土）、第４層（洪水砂層）、第５層（灰色粘質土）、第６層（黒色粘質土）、第７層（黒褐色砂質土）、第８層（灰白色シルト）、第９層（黄灰色細砂まじりシルト）、第10層（洪水砂層）、第11層（明緑灰色シルト）、第12層（洪水砂層）になる。

この中では、第６層が弥生時代中期から庄内期の遺物包含層で、第７層は弥生時代中期の遺物包含層である。この第７層上面が庄内期の遺構面である第１遺構面になる。そして第８層上面が弥生時代中期の遺構面である第２遺構面になる。第８層中には遺物は少ないが、第９層上面が第３遺構面になる。第９層・第10層からは遺物の出土は少ない。そして、第11層（洪水砂）上面において、第４遺構面が検出される。第12層以下については、今回の調査では遺構および遺物は確認できなかった。

第４遺構面

第11層上面（標高13.7ｍ前後）で検出した遺構面である。検出された遺構は、ピットが54個である。ピット内からの遺物の出土は少なく、また上層の第９・10層中からも遺物の出土が少ないため、時期については明確ではないが、第３次・第４次調査の弥生時代前期後半の遺構面（第５遺構面）に対応するのではないかと考えられる。

第３遺構面

第９層上面（標高14.0ｍ前後）で検出した遺構面である。検出された遺構は土坑７基、ピット63個がある。遺構内から遺物の出土が少ないため、時期については明確でない。第３次・第４次調査の第５遺構面と第４遺構面の間に相当する遺構面で、弥生時代前期末から中期初頭（第Ⅱ様式）ではないかと考えられる。

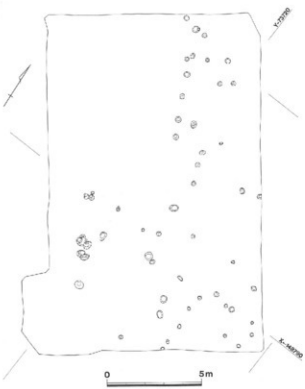


fig. 204　第４遺構面平面図

fig. 205　第３遺構面平面図

第２遺構面　　第８層上面（標高14.2ｍ前後）で検出した遺構面である。検出された遺構は竪穴住居１棟、土器棺（甕棺）１基、土坑10基、溝20条、落ち込み１基、ピット多数である。第３次・第４次調査の第４遺構面に相当し、弥生時代中期前半（第Ⅱ～第Ⅲ様式）のものである。

SB101　　調査区の西端で検出されたため、全体の約半分を調査できたのみである。直径約8.4ｍの円形住居になると考えられる。周壁溝の切り合い等から３～４回の立て替えが推定され、最終的には東側が張り出すような形態になっている。中央土坑も切り合いながら２基確認され、当初直径約60㎝であったものが、次の段階には直径約1.4ｍに拡大されている。柱穴については、６本ないし８本柱であったものと考えられる。住居址の埋土からは多量の土器の細片が出土しているが、その多くは第７層の流入土で、床面等からの出土は少なかった。ただ、砥石が２点出土している。また、床面近くで管玉片が１点出土している。

fig. 206　SB101

fig. 207　SK111

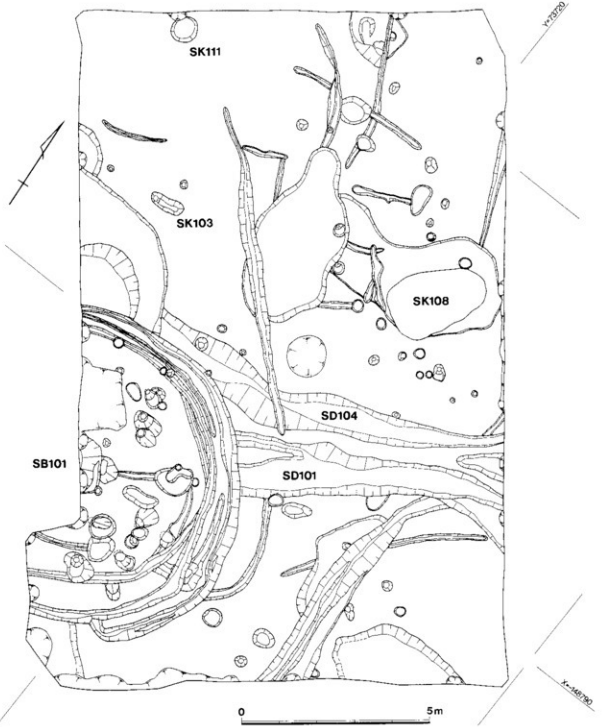


fig. 208　第２遺構面平面図

SK111　調査区の北側で検出された甕棺である。直径約80cmの円形土坑に２個体の甕を口縁部を合わせるように埋設しているが、蓋に相当する甕は体部から口縁部のみを使用している。時期については、第Ⅲ様式の古い段階と考えられる。

土　坑　SK103からは第Ⅱ様式の高坏がほぼ完形品で出土している。SK108からは大量の土器が一括投棄されており、弥生時代中期前半の比較的まとまった資料となるかもしれない。

溝　溝（SD101, 104）からも比較的まとまって遺物が出土している。SD101は第Ⅲ様式段階、SD104は第Ⅱ様式に遡る可能性の高い大型の甕が出土している。

第1遺構面　第7層上面（標高14.4ｍ前後）で検出した遺構面である。検出された遺構は落ち込み1基、ピット20個である。第3次・第4次調査の第3遺構面に相当する遺構面で、弥生時代終末段階（庄内併行期）のものである。

SX01　直径約2.8ｍの円形に近いもので、当初は小型の竪穴住居ではないかと考えていたが、床面に柱穴等は全く確認できなかったため、円形落ち込みとして扱うことにしたものである。出土した土器は、上層の第6層から流入したものと判断され、この落ち込みに確実に伴うような遺物は確認されなかった。

この面での検出遺構からも遺物の出土は少なく、各遺構の時期については明確ではないが、遺構面上で土器がまとまって出土した部分があり、その中に庄内甕が搬入されている。

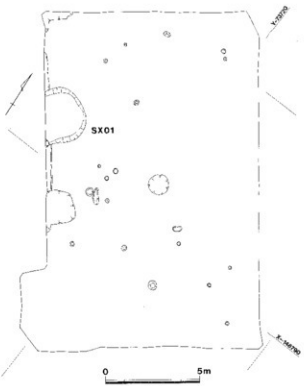


fig. 209　第1遺構面平面図

出土遺物と時期　第4・第3遺構面では、各面の遺構に伴うような土器が少なく小片が多いため、その時期を特定することは困難であった。しかし、第3次・第4次調査に対応する遺構面を考慮すると第4遺構面は弥生時代前期後半、第3遺構面は弥生時代前期後半～中期初頭となろう。また、第1遺構面の時期については、遺構面上で検出された土器群中に庄内甕が存在していたことから、庄内併行期と確認することができた。今回出土した庄内甕は河内地方の胎土を有するもので、河内地方から持ち込まれた土器である。

出土遺物で主体を占めるものは、今回の調査においても第2遺構面の遺構に伴う遺物である。これらは弥生時代中期前半段階のものに限定され、第Ⅱ様式～第Ⅲ様式への土器の流れを考えていくうえで重要な資料である。今回の調査では、石器類の出土は比較的少なく、調査地点ごとによって石器の出土量にばらつきがみられるようである。

3．まとめ

今回の調査においても、弥生時代中期の遺構・遺物が多量に検出された。これは、これまで調査されてきた内容と符合する結果である。この調査地付近の戎町遺跡の中心時期の一つが弥生時代中期（第Ⅲ様式）であることを物語るものである。今回の調査では第Ⅱ様式の遺構・遺物も比較的多く、集落と土器の変遷を考えていく上で貴重な資料といえる。第3次・第4次調査においても、ほぼ同時期・同規模の円形竪穴住居が検出されている。直径8～9ｍの比較的大型の竪穴住居がこのように近接して営まれていたことは、戎町遺跡の集落構造を考えていく上において重要である。

また、今回甕棺が検出されているが、これは竪穴住居に比較的近接して埋葬されたものである。第17次調査においても認められる事例で、弥生時代の葬送儀礼を考えていく上での手がかりとなり、集落域の中に葬られた被葬者を考えていく上でも重要である。

36. 戎町遺跡　第21次調査

1．はじめに

戎町遺跡は、現在の妙法寺川下流域の東岸の扇状地の末端部から、自然堤防が発達するいわゆる沖積地に立地する遺跡である。これまでに実施されてきた20回におよぶ発掘調査成果から縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが判ってきている。

今回の調査は、4階建て個人住宅建設に先立つものである。試掘調査の成果に基づいて建物基礎掘削部分で遺跡の破壊される部分を対象として現地表下より1.5ｍまでの深さについて調査を実施した。

fig. 210
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

掘削作業は、盛り土・攪乱層を重機で掘削した後、人力で掘削を行った。なお、遺物の取り上げ等に便宜を図るため、1～6区と調査区を設定した。

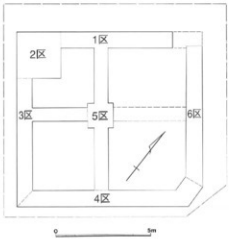


fig. 211調査区配置図

第1遺構面

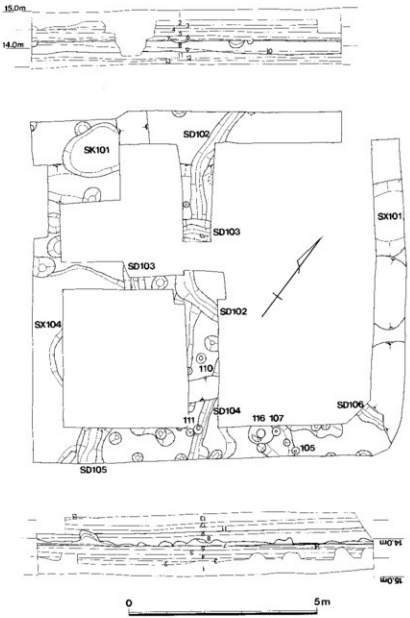
古墳時代中期・後期および鎌倉時代前期の遺構が同一面で確認された。ピット29基、溝状遺構5条、土坑1基、不整形な落ち込み5基などの遺構が確認された。

SP105

4区で確認された柱穴で、直径22㎝、深さ20㎝の掘形に直径10㎝の灰色極細砂質シルトの柱痕が確認されている。完形に復元できる瓦器埦が1点出土している。

SP107

4区で確認された柱穴で、直径22㎝、深さ34㎝の掘形に直径5㎝の淡黒灰色極細砂質シルトの柱痕が確認されている。龍泉窯系青磁碗・青磁皿・瓦器皿・土師器皿・鉄製品が出土している。



1．盛り土・撹乱
2．耕土
3．灰色極細砂質粘土
4．暗褐灰色シルト質細砂
5．乳灰色シルト混じり細砂～粗砂
6．暗褐灰色シルト質極細砂～細砂
7．暗黄色粘土（Fe）
8．淡黄色シルト質極細砂
9．淡乳黄色シルト質極細砂（土壌化）
10．乳灰色極細砂質シルト
11．淡黄灰色シルト混じり極細砂
12．淡乳灰色～明黄色粘土
13．淡青灰色極細砂質シルト
（5～10㎜の炭粒多し）
14．淡灰色シルト質細砂
15．淡青灰色細砂～中砂

Fig. 212
第1遺構面平面図

SP111　4区で確認された柱穴で、直径24㎝、深さ35㎝の掘形に直径12㎝の灰色極細砂質シルトの柱痕が確認されている。瓦器皿・土師器皿・鉄製品が出土している。

以上のピットは、いずれも鎌倉時代前期のものと考えられる。

SP116　4区で確認された柱穴で、直径67㎝、深さ66㎝の円形の掘形に直径22㎝の褐色系極細砂質シルトの柱痕が確認されている。出土遺物には土師器の小片がある程度であるが、埋土から古墳時代後期と考えられる。

SD103　3区・5区Nで確認された最大幅60㎝、最大深さ38㎝の溝状遺構で、調査区内を横切っている。埋土上層は暗乳褐色シルト質極細砂、下層は灰色シルト質極細砂である。出土遺物には須恵器坏蓋や土師器片などがある。

SD105　4区で確認された最大幅68㎝、最大深さ33㎝の溝状遺構で、SX104を切っている。埋土上層は灰色～暗灰色シルト質極細砂、下層は灰色シルト質極細砂である。土師器片が出土している。SD103と埋土が類似しており、その方向性からも同一の遺構と考えている。

SD102　1・5区で確認された幅35～58cm、最大深さ18cmの溝状遺構で、SD103に切られている。埋土上層は淡灰褐色シルト混じり極細砂、下層は暗乳褐色シルト質極細砂～細砂である。出土遺物には土師器片などがある。SD106も埋土やその方向性から同一の遺構と考えられる。

SK101　2区で確認された長径1.7m、短径1.3m、最大深さ11cmの楕円形の土坑である。埋土は暗乳褐色極細砂質シルトである。出土遺物には古墳時代後期の須恵器・土師器片がある。

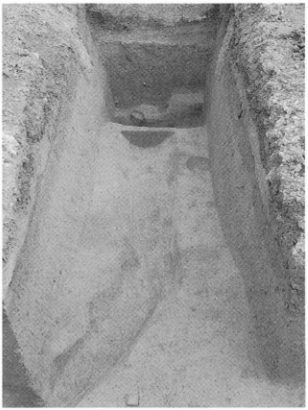


fig. 213　第1遺構面5区北

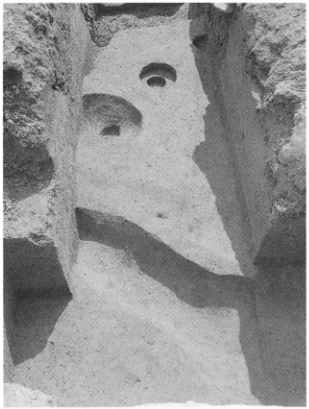


fig. 214　第1遺構面5区南

第2遺構面　試掘調査では確認できていなかった遺構面で、古墳時代前期初頭のものと考えられる。今回の狭い調査区内においても、層の厚薄が認められ、土壌化の程度も場所によってかなり異なっていた。土壌化層は概して淡乳灰色シルト質極細砂で、明黄色シルト混じり極細砂が基盤層であると考えられる。しかし、全般的に出土遺物は少なく、遺構は住居址様の落ち込みが1基確認できたにとどまる。

fig. 215　第2遺構面SX201

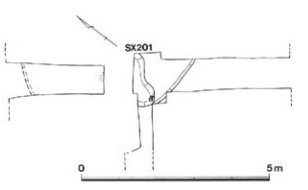


fig. 216　第2遺構面平面図

SX201　5区Sで確認された住居址様の落ち込みで、最大深さ6cmである。埋土には直径5mm前後の炭粒が多く含まれており、5区Nで確認できた同様の土層もこの遺構の埋土であったと考えられる。5区Nを含めて復元すると、最大幅4.5mの遺構となる。なお、平坦な底面で確認された深さ5cmの不整形な土坑から土師器塊が2個体出土している。また、1区東端から6区北半にかけても炭粒を多く含む乳灰色極細砂質シルト層が確認できている。

第2遺構面下層　試掘調査の成果から、今回の調査対象となるG.L.－1.5mまでの範囲には埋蔵文化財の確認できない可能性が高かった。そこで、1・4・5区と6区の一部についてはG.L.－1.5mまでの深さまで人力掘削を行ったところ、遺構・遺物は確認できなかった。試掘調査の成果からみて、下層は弥生時代後期段階に埋没した流路であったようである。

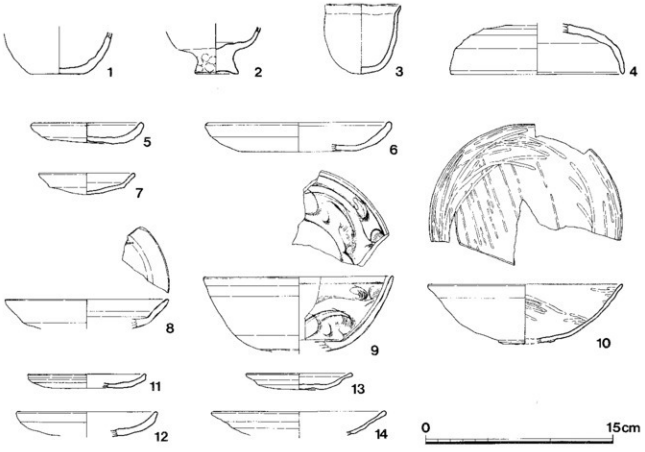


fig. 217　出土土器実測図（1・2：5区SX201　3：4区包含層　4：5区SD103　5～9・12・13：4区SP107　10：4区SP105　11・14：4区SP111　1～3・5・6・11・12：土師器　4：須恵器　7・10・13・14：瓦器　8・9：青磁）

3．まとめ

今回実施した調査は、これまで実施してきた調査地点とは、位置的にやや離れていることもあり、基本層序が異なり、戎町遺跡内において新たな成果を収めることとなった。

その中で、13世紀前半の集落遺構は、板宿駅前で集中してこれまで確認されていた。その立地範囲については現状では明確にできないが、今回の調査地点まで明らかに拡大することが判った。

一方で、古墳時代中期・後期の遺構が今回初めて確認され、今後の周囲での調査には注意を要する。また、試掘調査ではさらに下層で弥生時代後期の流路の堆積が確認できており、旧妙法寺川と集落立地の関係を地形環境面からみていく上での新しい資料と言える。

37. 大田町（おおたちょう）遺跡　第6次調査

1．はじめに

大田町遺跡の範囲内において、震災で全壊した家屋のかわりに共同住宅の建設計画がもち上がってきたため確認調査を実施した。その結果、遺物の包含層が確認されたので、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を実施することとなった。

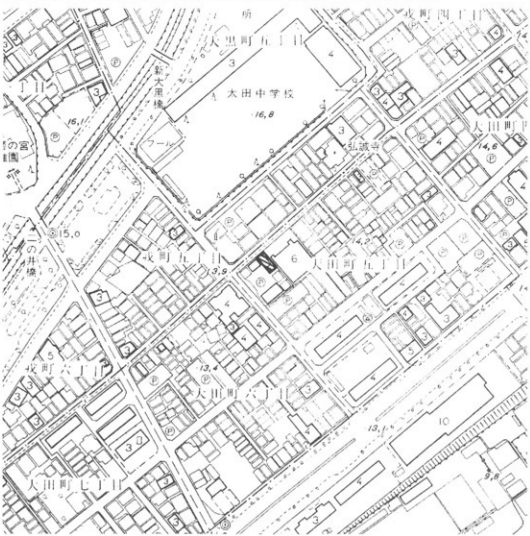


fig. 218
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

遺構は南半のみで掘立柱建物（部分）・柱穴・竪穴状遺構などを検出した。北半については削平を受けていたため、何ら遺構を確認することはできなかった。

掘立柱建物は、建物の北東部に相当する。その規模はほとんどが調査区外であるため、まったく不明である。このほかにも多くの柱穴を検出したが、建物を復元するには至らなかった。これらのほとんどの時期は、奈良時代のものと考えられる。

竪穴状遺構は遺構検出時、方形プランであったので竪穴住居の可能性も考えた。ところが埋土から奈良時代の須恵器坏蓋や土師器片などがわずかながら出土したことから、竪穴住居とは言い切れないということで竪穴状遺構とした。時期は奈良時代と考えられる。

出土遺物は、古墳時代（6世紀後半）から奈良時代（8世紀）にかけての須恵器・土師器、中世（12世紀頃）の三足鍋・東播系須恵器などがあげられるが、量は非常に少ない。

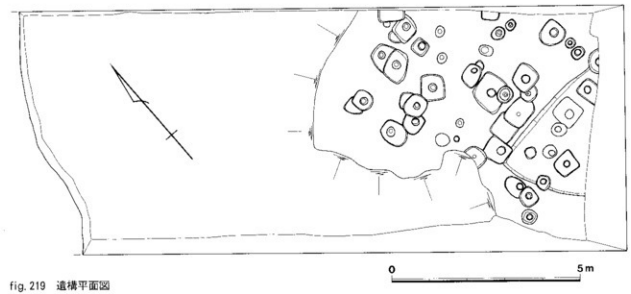


fig. 219　遺構平面図

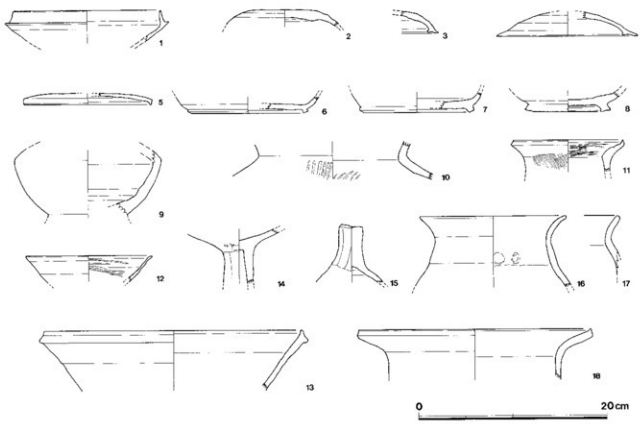


fig. 220　出土土器実測図（1～10・12・13：須恵器　11・14～18：土師器）

3．まとめ

大田町遺跡は、これまでの調査で古代山陽道に面した官衙的な性格をもった建物と、それを取り囲む形で工房域や一般の集落域が検出されている。今回は奈良時代の建物の一部を検出したにすぎず、その性格までを想定するには至らなかった。しかし、これまでの大田町遺跡のなかで、もっとも北に位置するところで奈良時代の遺構が確認されたということは、遺跡の広がりを考える上で、貴重な成果を上げたと言えよう。

今回の調査区北半は、削平を受けていたため遺構・遺物は検出できなかった。ここよりも、さらに北側に遺構が広がるかどうかについては、今後の調査に期待したい。

38. 大田町（おおたちょう）遺跡　第8次調査

1．はじめに

大田町遺跡は須磨区の東部を流れる妙法寺川の左岸に位置する。

過去の数次にわたる調査で、同遺跡が旧山陽道の「須磨駅」とその関連集落にあたる可能性が高くなった。また、その下層からも古墳時代と弥生時代の遺構・遺物が確認され、弥生時代～平安時代の複合遺跡であることも合わせて確認された。

今回の調査は震災復興における個人住宅建設に伴うもので、古墳時代～奈良時代の遺構、弥生時代～近世の遺物が確認された。

fig. 221
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査は工事影響深度のG.L.－1ｍまでとし、その範囲内で3面の遺構面が確認された。

基本層序

現代盛土、旧耕土の下に中世の旧耕土と考えられる濃黄灰色砂質土が存在し、その下層上面が第1遺構面となる。第1遺構面のベース層は灰色細砂混り粘砂土で、5世紀末～7世紀初頭の遺物を多く含む層である。この灰色細砂混り粘砂土の下層上面が第2遺構面となる。第3遺構面との間には、第2遺構面のベース層である濃黄褐色粘質土とその下層の濃褐灰色粘砂土が存在し、前者には須恵器が含まれており、後者には含まれない。第3遺構面のベース層は遺物を含まない淡灰茶色細砂混り砂質土で、その下層については今回の調査では未確認である。

第1遺構面

奈良時代の遺構面と考えられるが、溝状遺構（SD01）のみを検出した。その埋土からは8世紀後半の遺物が出土した。

第2遺構面

調査区の西端で流路状遺構（SD02）の東側肩部が検出された他、4か所のピット状遺構（SP01、02他）、土坑状遺構（SK01）が検出された程度である。SD02・SP01より、古墳時代後期～末期のものと考えられる遺物が出土した。

第3遺構面

ピット状遺構、土坑状遺構などが検出されたが、埋土中に遺物はなく、いずれも時期は不明であるが、上層の遺物包含層の状況から、古墳時代の須恵器出現期以前の遺構面である可能性が高い。

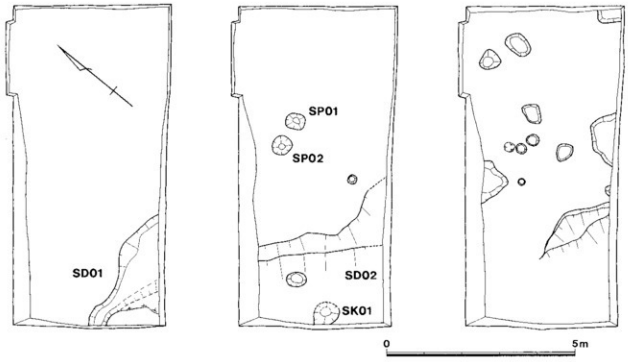


fig. 222　遺構平面図（左：第1遺構面　中：第2遺構面　右：第3遺構面）

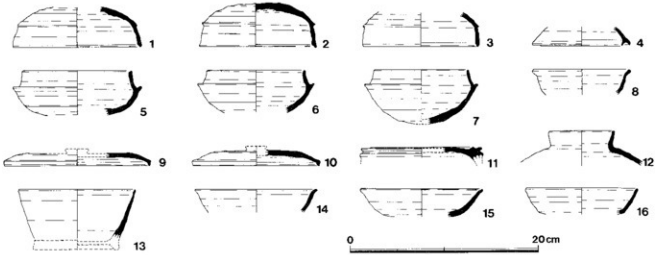


fig. 223　出土遺物実測図（SD01：4・9・13～15　SD02：8・12　濃黄灰色砂質土：13・14・16
灰色細砂混り粘砂土：1～3・5～7　14：緑釉陶器　15・16：土師器　他は須恵器）

3．まとめ

今回の調査は、過去の大田町遺跡の調査と比べると、遺構・遺物の質量がやや乏しいものの、遺構あるいは遺物包含層中から、円面硯の破片や緑釉陶器片も数点出土しており、過去の調査で明らかになりつつある官衙的集落の一端が確認できた。

また、同遺跡が旧山陽道「須磨駅」の関連集落というだけでなく、今回の調査でも古墳時代の遺物が多く出土し、わずかではあるが、古墳時代の遺構も検出されたことは、同地域における古墳時代の集落の拡がりを考える上で重要だと言えよう。

その他、弥生時代の遺構・遺物の状況は、遺物包含層中より弥生時代後期のものと考えられる土器片が出土しており、同調査区内下層で弥生時代の遺構面が存在する可能性は極めて高い。

39. 大手町（おおて）遺跡　第１次調査

1．はじめに

大手町遺跡は、都市計画道路山麓線代替地宅地造成に先立って平成７年６月29日に実施した試掘調査によって、初めてその存在が明らかとなった遺跡である。試掘調査では、土器を包含する遺構が確認されている。

調査地点は標高約28ｍの地点で、妙法寺川の支流東細沢谷川に沿って西北西からのびる丘陵末端部に立地するものと想定され、調査地点の南側で傾斜が大きく変換し、比較的緩やかな地形となっている。

当遺跡の周辺では、東方約500ｍに弥生時代～中世の複合遺跡である戎町遺跡、南東方向約500ｍには須磨の駅家と推定される大田町遺跡、西方約500ｍには中世の集落址の若木町遺跡、北西約300ｍには大手古墳群、南方約250ｍには中世集落址の権現町遺跡などの遺跡が知られている。

神戸市都市計画局では、阪神・淡路大震災以後「山麓線」の街路築造事業を復興事業のひとつとして位置づけた上で事業を進めていたため、今回は宅地造成に伴って埋蔵文化財に抵触する切り土部分と擁壁施工部分の約320㎡について、発掘調査を実施した。

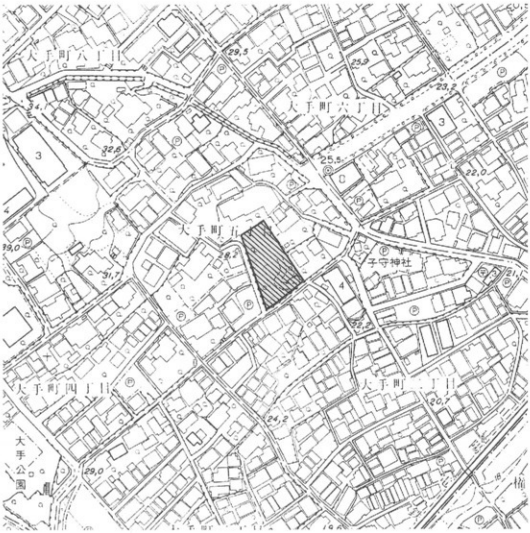


fig. 224
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　調査は、8か所の調査区（トレンチ）を設定して実施した。

1トレンチ　幅1.5ｍ、長さ約8ｍの調査区で、すべて近代以降の攪乱のため、文化財は確認できなかった。

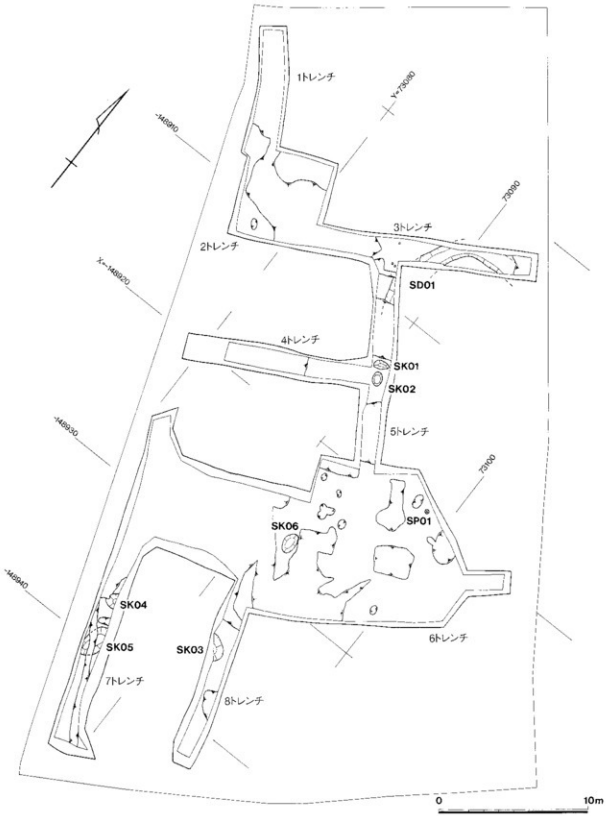


fig. 225　遺構平面図

2トレンチ　東西約6m、南北約6mの調査区である。中央に現代の攪乱（旧宅の池？）のため、ほとんど遺構面は残っておらず、遺構は確認できなかった。

3トレンチ　幅1.5m、長さ約15mの調査区である。西側の約5m部分は、2トレンチから続く攪乱のため、遺構面は全く存在しなかった。東側は攪乱が少なく、幅93cm、深さ18cmの溝状遺構（SD01）が確認された。埋土は暗褐色シルト混じり極細砂～細礫で、出土遺物には弥生時代中期中頃から後期にかけての土器がある。

4トレンチ　幅1.5m、長さ約13mの調査区である。西半の約8m間は、2トレンチと同様攪乱のため、遺構面は全く存在していない。東半では乳色細砂～粗砂の基盤層が確認されたが、遺構・遺物は確認できなった。

5トレンチ　幅1.5m、長さ約14mの調査区である。遺構面の存在する範囲は北端の約1.5mと中央部の約3mのみで、3トレンチで確認されたSD01に続くと考えられる溝状遺構と土坑2基（SK01・02）が確認された。

SD01　最大幅50cm、深さ17mで、3トレンチに比較すると、遺物がややまとまって出土している。完形に復元できる小型の弥生土器甕などがある。

SK01　長軸88cm、短軸51cm、深さ16cmの土坑で、弥生土器と石鏃が出土した。

SK02　長軸70cm、短軸65cm、深さ15cmの土坑で、弥生土器が出土した。

6トレンチ　東西約26m、南北約12mのいびつな調査区で、今回の調査区では最も面積が大きい。近代以降の攪乱のため、西半では乳色細砂～粗砂の基盤層が存在していなかった。東半でも攪乱は著しかったが、土坑とピットをそれぞれ1基ずつ確認できた。

SK06　長径143cm、短径104cm、深さ7cmの土坑で、出土遺物には縄文時代晩期の土器片がある。在地産の胎土をもつ突帯文土器数点に、外面に削り痕が明瞭な生駒西麓産の胎土をもつものが含まれる。

SP01　直径約38cm、深さ7cmのピットで、平安時代末の須恵器片が出土している。

なお、遺構面直上から弥生時代中期の土器片が、攪乱内から石鏃1点が出土している。

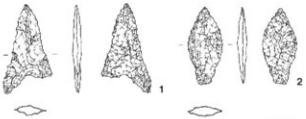


fig. 226　出土石鏃実測図（1：SK01　2：6トレンチ）

fig. 227　6トレンチ全景

fig. 228　7トレンチ全景

7トレンチ　幅1.5m、長さ約15mの調査区である。北側の約5mは、6トレンチから続く攪乱のため、遺構面は全く存在しなかった。調査区中央やや北側で土坑2基が確認された。

SK04　長軸98cm、短軸50cm以上、深さ21cmの土坑で、弥生土器が出土した。

SK05　長軸2.3m、短軸1.2m、深さ25cmの土坑で、弥生土器が出土した。

なお、両遺構の上面には一部遺物包含層が遺存しており、平安時代後期の土器なども出土している。

8トレンチ　幅1.5m、長さ約10mの調査区である。北端で土坑1基を確認したほかは、自然地形の傾斜面が確認できたにすぎない。

SK03　長軸1.6m、短軸0.62m、深さ15cmの土坑で、弥生土器・黒色土器・土師器が出土している。平安時代前期の遺構であろう。

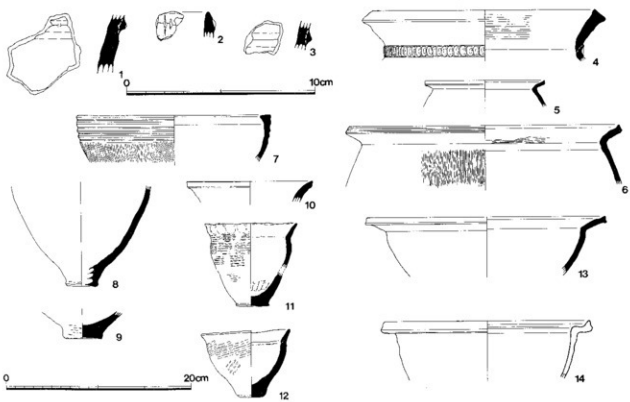


fig. 229　出土土器実測図　(1～3：6トレンチSK06　4～6・8・9：6トレンチ　7・10・11・13：5トレンチSD01　12：7トレンチSK04　14：7トレンチ)

3．まとめ

今回の調査は、近世～現代の攪乱の密度が高かったため、確認できた遺構の密度は高くない。出土遺物からみると、今回の調査地点が弥生時代中期～後期の集落址の一部であることが明確にできたものの、調査範囲も限られており、その性格については多くを語ることはできない。また、遺跡の存続時期が縄文時代末から平安時代後期まで至ることが明らかとなった。攪乱が少なく、本来の土層が良好に残存しておれば、遺跡内容もさらに豊富になったものと考えられる。

今後周辺での発掘調査が進んでくれば、大手町遺跡の遺跡の内容がより具体化するであろう。

40. 垂水（たるみ）・日向（ひゅうが）遺跡　第14次調査

1．はじめに

垂水・日向遺跡は、福田川の右岸、河口部の沖積地に位置し、標高海抜５ｍ前後に立地する。遺跡は昭和63年の垂水駅前再開発事業に伴う調査で、奈良・平安時代を中心とする集落遺構が検出され、その下層に縄文時代の土器を含む流路や、縄文時代前期以前と考えられる人間の足跡が発見されて、初めて知られるようになった遺跡である。

その後、再開発事業および周辺のビル建設に伴う調査が12次実施され、縄紋時代から中世にいたる複合遺跡として認識されるに至っている。

今回の発掘調査は、第９次・第10次調査の西側、再開発予定地域の南西部に位置している。調査は、西部と南部の奥から調査を開始してＡ区とし、北東部をＢ区として後半に調査を実施した。

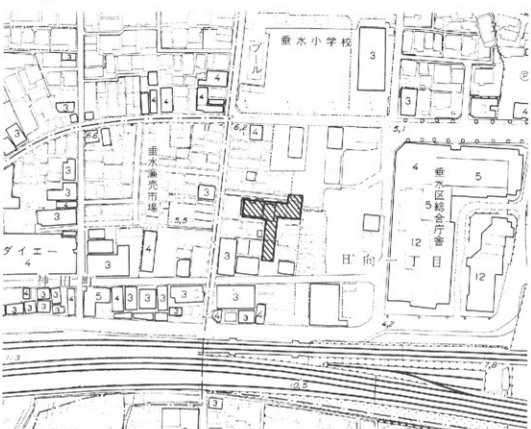


fig. 230
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査でも、これまでの調査と同様に３面の遺構面が確認されている。黄褐色粘質土を基盤面とする奈良・平安時代の遺構面は、調査区の北東部に拡がるが、南西部では、南に緩やかに傾斜して、弥生土器細片を含む暗褐色シルトが堆積している。

この基盤面からは、奈良時代から平安時代の掘立柱建物や弥生時代の竪穴住居・溝などが検出されている。基盤面の下層には、縄文時代の洪水跡、さらにその下の火山灰層直下には縄文時代前期以前の人の足跡が検出された。

第１遺構面

第１遺構面では、奈良時代後期と考えられる、掘立柱建物３棟、弥生時代中期と推定される溝１条、井戸１基、時期不明の河道を検出した。

fig. 231 第1遺構面平面図

掘立柱建物　調査区の中央部で3棟が重複して検出された。いずれも一辺50～60cmの方形の柱掘形を掘り、総柱造りである。柱掘形は削平をうけ10～30cm前後の深さになっている。また一部の柱では抜き取り痕跡がみられる。規模・方向については下表のとおりである。

	規　模	柱　間　隔	方　向
掘立柱建物1	東西8.7 m，南北7.9 m （3間）　（3間）	東西3.0 m等間 南北2.7 m×2.4 m×2.7 m（北から）	北7° 東
掘立柱建物2	東西8.0 m，南北10.0 m （3間）　（3間）	東西2.5 m等間 南北3.2 m×3.6 m×3.2 m（北から）	北10° 西
掘立柱建物3	東西6.0 m，南北7.5 m以上 （2間）　（3間）以上	東西3.0 m等間 南北2.5 m等間	北8° 東

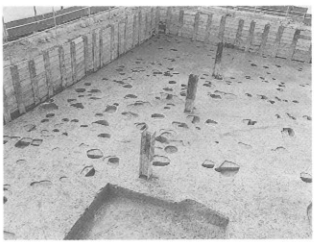


fig. 232　A区掘立柱建物

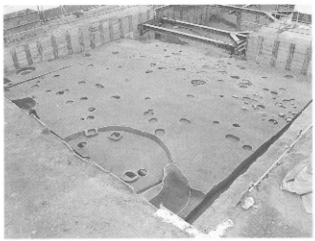


fig. 233　B区全景

竪穴住居　調査区の北東部で全体の60%を検出した。竪穴住居の東半分は第10次調査区にのびる。直径 4.6 mの円形の竪穴住居で壁体は21cmを残し、周壁溝を完備する。床面からは支柱 3 か所と南端で浅い落ち込み 1 か所が確認されている。床面出土の土器はないが、埋土内から弥生土器片とサヌカイト片が出土した。

溝　1　調査区南部の中央を北西から南東に流れる溝である。削平をうけ平面形は歪であるが、断面形は漏斗形で、溝幅は上端で 1.3 m、深さ60cmを計測する。溝の埋土の上層から石鏃 1 点が出土している。

溝　2　調査区の北東隅で検出した竪穴住居に接する溝である。断面U字形で、幅90cm、深さ25 cm前後を計測する。埋土内からは弥生土器の細片が出土している。

井　戸　調査区の南部東端で検出した溝 1 を掘り込む。直径 2 m、深さ60cmの掘形を掘り、中央に一辺 1.2 mの方形の井戸枠を掘えている。掘形・井戸枠の埋め土のいずれからも出土遺物はない。

河　道　調査区の南東端から南西隅にくの字状に流れる。幅は 2.3 m、深さは80cmを計測する。埋土内からの遺物出土はない。

第 2 遺構面　第 1 遺構面から50cmまで淡黄褐色粘質が堆積し、この土層からは遺物は出土しなかった。

洪　水　下層には 1.5 ～ 2.0 mの厚さで、シルトと砂・砂礫がレンズ状に堆積した洪水層となっている。この堆積層内には、木材化石や木葉を主体とする植物遺体層がところどころでレンズ状に堆積し、木材化石周辺の砂礫層からは縄文土器が出土した。

縄文土器　土器の出土は、砂礫層内と一括しているものの、その大部分は、木材化石周辺の砂礫層内が主な出土位置である。全て縄文土器で、縄文時代後期の磨消し縄紋と沈線を用いた中津式併行期のものから縄文時代晩期のものまで含まれる。他に砂岩を用いた凹石 1 点、不定形刃器 1 点が出土した。

木材化石　調査区の北部に集中し、ほぼ北から南に流出した状況で検出された。木材化石については、残存状況が良好な木材の一部を採取し、同定を行う予定である。

植物遺体　調査区の中央部を中心に厚さ50cm前後でレンズ状に堆積していた。堆積位置毎に 5 か所で一部を採集したが、一部の堆積層で帯状の細砂層の間層があり、上下 2 層に分けて採集した。